
新世界

北極星 1 1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新世界

【著者名】

N1528D

【作者名】

北極星11

【あらすじ】

ミコト（普通の高校2年生）が、現代の心に棲まつ病魔と対峙する物語。青春有、恋愛有、ちょっと現実離れした要素もあり。現代をどう生きるかという問いに、主人公の生き様を通して考えていく。後書きには、筆者のお勧めコーナー有！見てね～ようやくですが、総アクセス2000突破！ありがとうございます！

第1話 ～現代に潜む影～（前書き）

初めまして。「新世界」というタイトルは、新しい感じ方、考え方のある世界、見えない存在だけど、そこにあるもう一つの世界という意味で新世界というタイトルにしました。

個人的には、のんびりとした感じの小説が好きなのですが、どういう小説になっていくかはまだまだ分かりません。アニメ的な要素が強くなるかもしれません。

気長に付き合っていただければと思います。

第1話 ～現代に潜む影～

「いただきまーす。」

「おっ、つまそだな。その唐揚げもらー！」

「何、この唐揚げはだな、九州に住んでるおれのじいちゃんがな、

…」

「いただきまーす。」

「おひつ、いの」

「そんなんすねんなつて。わるかつたわるかつた。」

「ムスツ」

「まつたぐ、ミコトは食い物のことになるとすぐ意地張るよな。」

「おれはいつもあちやんに食い物を粗末にしちゃいけねえつてい
われてんだよ。」

「何言つてやがる。自分が食べたかっただけじゃねーか。つて、い
や、わるかった。そうだな。俺がわるい。たしかに。・・・あー、
もつすぐ授業始まるぞ。いくか。次なんだつけ？」

「まつたぐ、ちゅうししいいな。今度から揚げ返せよ。次は、体育だ
よな。」

「おつ、体育か、やつたな。」

「シンジは体育そんなにとくいじやないじやん。」

「いいんだよ。俺は、サトミちゃんと同じグループだから。」

「ああ、そうね。（この前は別の子の名前いつてたぞ…）。」

「さて、教室にもどつて着替えるか。」

（あれ、何か校内の様子がおかしいか？）ミコトは3階の窓越し
に体育館に生徒がたむりしているのを見かけた。

「あれ、なんだろ？」

そのとき、校内放送が校舎に響き渡った。

「『緊急連絡です。生徒のみなさんは、至急、教室にもどつなさい。』

繰り返します。至急、教室にもどりなさい。』『

「どうしたつていうんだ？」

「なんだろね。まあ、いわれなくとも教室にはもどるけどね。』

『「トトシンジは少し急ぎ足で教室にもどる。（何かあつたんだよな。なんだつ。胸がそそわそわする。）他の生徒も教室にもどってきた。サイレンの音がある。

「警察だ。救急車も。』

「なあ、何があつたんだ？」

「あれ、まだもどってきてない子がいる……」の席は、サトミへ。』

「あっ、本当だ。』

教室のドアが開き、担任の尾崎が入ってきた。（そんなに神妙な顔して、どうしちゃつたんだよ？）

「みんな、そろつているか。』

聞いたそばから尾崎は顔をしかめていた。なにやらサトミの空席をみている。

「サトミさんがまだきていません。』

誰かが先生に報告した。

「…知つていて。みんな、いすれ、わかる」とだから、君たちには今から伝えようと思つ。さきほど、山上君が…』

尾崎は田に涙を溜めていた。（山上？サトミのことだ。なんだ、この心臓の高鳴りは…。シンジ、どうしてそんなに顔が赤い？）

「…救急車で運ばれた。』

「えつ」ざわつき始める教室内。

「どうしたんですか？」

「放送がはいるまで、教室内に待機。帰りの仕度をしていなさい。』
教室をとびだすよつに尾崎は出て行つた。

「自殺？」携帯を見ていた一人の生徒がいつた。他の生徒もそれに群がる。（まじかよ。）シンジは、まったく動かない。

「シンジ…どうした？」

「いや、なんでもない。」

(自殺?・つちの学校で?・コースで最近話題になつてゐる?と思ひことはあつたけど、まさか、同じクラスで?いや、誤報かもしれない。なんでこんなにびきびきする?それに、どうしてシンジはあんなに顔が赤いんだ?何か知つてゐる?とがあるのか?)

第1話 ～現代に潜む影～（後書き）

御一読ありがとうございました。
レスもおまちしております^ ^

第一章がいきなり過激になつた感もあり、反省しております。
文章がつたなくて、本当に申し訳ないですが、おいおい改善できればと思います。

筆者お勧めコーナー

ここでは、好きな漫画や小説やいろいろなものを紹介していきます。
第一回田の紹介は難しいですね。
うーん、第一回田にふさわしいか分からぬけど、「天空の城ラピュタ」がいいですかね。
シータやバズーとか、海賊の名前覚えてますか？
第一回は、もっとマニアックなものを紹介したいと思います。
海賊のおばさんの名前も第一回の後書きに^ ^

第2話 ～自殺の理由～（前書き）

こんばんは。第2話に進んでくれてありがとうございます。
シンジとミコトのやり取りがメインです。
ミコトの妹のチサも登場します。

第2話 ～自殺の理由～

あやふやな情報が確信に変わったのは、やはりTVの「ラウンド管を通じてだった。神城高校2年生のAさんが、体育館倉庫で首を吊り自殺。（…せんぜん実感がわからない。なぜだらう。あのときのシンジの顔、きっと何か知っている。できれば、関係がないにこしたことはないけど。それともシンジは本当にサトミが好きで固まつただけなのか？）

翌日の学校は臨時に休校となつた。

「ねえ、お兄ちゃんの通つてる学校つて、結構頭いいよね。「世間一般にはそういうわれているけど。ビリしてそんなこと聞くんだ？」

「うーん、なんで頭いい人が自殺なんてしちゃうのかなって思つて。

「そりだよな。よつぱり覚悟がないとできないよな。」（やつ。何かがあつたんだ。）
「なあ、チサは…（自殺を考えたことあるかなって聞けないな…）どこの受けるんだ？」

「えつ、まだ私中2だよ。あんまり考えてないんだ。お兄ちゃんとおんなじ高校にしようかなつて思つてたんだけど。」「

「そりだよな。まあ、悪くないと思つた。」

（そう。うちの高校は悪くないと思つ。サトミがいじめられているつていうか、うちのクラスにそもそもいじめはなかつたはずだ。なんにも起こらない。いや、原因があるとすれば、成績が下がつたか？家庭の問題？失恋？考えてみればいろいろとあるな。）

「…ねえ、お兄ちゃん、聞いてる？」

「えつ、うん。何が？」

「何がじゃないよ。もう、お兄ちゃんは、何か考え出すとすぐマイワールドに入っちゃうんだから。…サトミもさつてどうこう人だつ

たの？」「

「えつ、どうしてサトミって名前知ってるの？」

「そりや私だって少しぐらい情報網はあるわよ。もひ中学2年生よ。」

「そうなのか。サトミって子か、…どうこうすりてこわれても。まあ、顔はかわいいけど、もういえば、シンジはサトミにホの字だつたな。あとは、おとなしめかなあ。」

「へえ。でも、不思議だよね。自殺なんて、…。」

(シンジに電話してみよう。もし、関係があるんだったら、話を聞いてやらなくちゃいけないしな。)

少し重く感じる手を伸ばし、電話に手をやつた。ミコトは携帯などはもっていない。専ら家庭の電話機で友達とやり取りしている。

「なあ、シンジか？ 今だいじょづぶ？」

「ああ。」

「あのせ、昨日のことだけ、シンジは、何か知ってるのか？」

「…ああ、いや、そんなことは関係ないと想つんだけど…。」

(シンジがいつに無く真剣だ。やっぱり、心当たりがあるんだろうか。)

「あのせ、おれ、サトミ告つたんだ。」「

「えつ、… そーカ。(シンジ、本当に好きだったんだ。つてか、俺にも相談しろよ。) どうだつた？」

「いや、だめだつたんだ。ただ、このまま友達関係でいようとつて約束して、それから、… 昨日が告つてから3日だつたんだ。俺、何がなんだか分かんないんだよ。」

「落ち着けつて。シンジは告つた方なんだろ。もし自殺するんなら普通はフられた方がするつて。」「

「だよなあ。」

「あつ、ごめん。シンジ、自殺しないよな？」

「当たり前だろ。振られたことは一度や二度じゃないぜ。」

「さすがだな…。」（よかつた。そんなことか。サトミの血殺はシンジのせいじゃない。）

「ありがとな。話せて、気がちょっと楽になった。」

「いいよ。俺もちょっと気になつてて、知りたかったんだ。まあ、シンジが悩んでそつなのが分かつたから電話したんだけど。（不思議だな、明日から、サトミがない学校生活が、また、普通に始まるんだらうな。）

第2話 ～自殺の理由～（後書き）

御一読ありがとうござります。
よかつたらレスお願いします。

こんな小説でも、読んでもらえるといつのは嬉しいです^ ^

筆者コナー

ラピュタの女空賊の名前は、ドーラですね^ ^

今回の紹介は、バンプオブチキンの「花の名」です。
「生きる力をくれたから、生きているうちに返さなきや」
という歌詞がいいですね。よかつたら聞いてみてください^ ^
Y - TUBEで聞けます^ ^

第3話 ～少年と少女の事情～（前書き）

第3話です。

いよいよ新世界のメインである、守護神との接触です。
今までシリアルでしたが、基本的にはこれからの話のほうが本題に
近いです。

ただ、シリアルな部分もださないと、現代の心の問題に迫れないと思
い、苦手ですが

シリアルな心の描写もしていけたらと思います。（だつたら書くな
よ・・・ですね＾＾：）

サトミの心の声から始まります。

第3話 ～少年と少女の事情～

「ねえ、シンジ君。どうして私なんかに告白したの？わたし、もう嫌なんだ。男の子にふりまわされたり、勉強したり、親の顔色みたり、いろんなこと我慢して。」

「えつ。別に、大して考えて無いんだけ…。ほら、体育で一緒にチームで楽しくやつてるじゃんか。サトウも楽しくやつてたでしょ？だから、もしよかつたら、付き合えないかなと思つて。」

「楽しく？ううね。男の子はいいわよね。何でも本心でいえて。どうして楽しいと思ったの？わたし、別に楽しいなんて思わなかつたわ。みんなに合わせて、笑つたりしていただけ。」

「えつ、ううなの？」

「ううなの。」

「なんか、サトウって、思つたより、冷たいよな。」

「それはあなたが勝手にそう思つてたいだけでしょ。」

「いいよ。結局、だめなんだろ。別に。いや。なんか、そんなやつつて思わなかつた。」

「ううね。わたしも、…（もうこやつーもうこや、もうこや。）

「えつ、なんで、泣くんだよ…。」

「あなたに関係ないでしょ？ほつておこじよ。」

（おかしいの。私の心はおかしいの。告白されて、少しほは嬉しいはずなのに、悲しいの。告白してくれても、すぐに冷たくされる。お父さんも、お母さんも同じ。いつも冷たい。そりや、私だって家に帰つたらわがまま言つたり、言つこと聞かなかつたりするけど、でも、がんばつてるじゃない。どうして、誰もわかってくれないの？誰もみてくれないの？）

「あのむ、一応、俺が言い出したことだから、…『めんな。』

（あやまつてもダメよ。あなたが私を好きつて言つたのに、「そんなやつつて思わなかつた」っていうたじゃない。どうひよ。私つて、

そんなやつなの？そんなやつ…）

「まあ、これからは、いつもどおりの友達として、やつてこいつな。（信じられない。そんな、やつてこけるわけ無いじゃない。いや、せんじる君も嫌。）

「やうね。（あなたとま、関わりたくないの。みんなとま…）」

「サトミ、一ヶ月ぐらい前からなんか変わったよね。」

「家で何があったのかな？」

「ちよつと暗くなつたよね。」

「うん。前まで、明るかつたよ。」

「あ、サトミがこっちへくるよ。」

（いち見て何か言つてるわ。どうして？怖い。いつから…どうしてこんなに友達が怖いの？おかしくなっちゃつたの…）

「あつ、どうしたの？」

「つりん、なんでもない。」

「わら。…あのせ、何か言いたい」とあつたら、直接言つてくれる

?」（えつ、こんなこと私がいつてるの？）

「えつ。ほんとに、なんでもないから。」

「何、あの間に。ウザイよね。」

「どうかしてるよ。」

「どうかしてるよ。」

「まつておいてよ。後でするから。」（もつ、家ですきなこととしたつていいじゃない。）

「こつも後で後でつて言つてるでしょ。」

「いいのよ。つむといなあ。母さんまといよね。仕事もしてないし、宿題だつて無いし。父さんがいないと何ともできないじゃん。」

「どうしてサトミはそんなことこうの？信じられない？」

(もういや、ほっておいでよ、学校?家?わたしまどいこればい
いの?誰からも愛されない。誰からも認められない。)

「なんで母さんは分かつてくれないの?」

「あなただって、母さんのことわからなこじやない…もう高校生で
しょ。甘えるんじやないわよ!」

(もういや、もういや、もういや、全部いや、もういやーーー)

(あーあ、どうして私、生まれてきたんだろう。さみしいな。きっと
と、私だけだよね。みんなはみんなに笑ってる。ここなあ。もう、
わたしには、無理だよ。)

(ちよっと待つてよ。待つて。何これば?サテ?の心?つそだら。

「…へ運びなれこ。おこつ。神崎。神崎!」

(「こは?保健室?どうしてこんなところにいるの?」そうか、尾崎
先生に、サトミの机を運ぶように言われて、それで…。うつ、思
出した。あれは、夢?机から声が聞こえたんだ。)

「神崎君、大丈夫?」

保健の浅井先生だ。相変わらず香水が強い。嫌なにおいじゃないけ
ど、きつい。なんで保健の先生つて近くにいるけどじきするんだ
る?これが大人の魅力つてやつか?

「あつ、ありがとう」それこます。」

「びっくりしたわ。いきなり尾崎先生が『診てくれ』って運んでく
るんだもの。」

「あつ、そうだつたんですか。あの、浅井先生…」

「あひ、どうしたの?」

神崎ミコトは、汗を一筋ながしながら、浅井先生の背後を指さした。

「ところで…その、後ろのおじ…。」

(やばこ、まだ夢の中にいるみたいだ。…口も、体も動かない。お

い、あんた誰だ？誰なんだ？なんで体がすけてるんだーーー！

「ん？何？どうしたの？」

(確かにいる。まだこちらを見ている。)

「浅井先生、お電話です。」

「はーい。今行きます。それじゃ、神崎君、ちよつといじりで待って
いてね。」

(これは、やばい。開け。俺の口。なんだよ。これは...)。

「あの、…あなた…です?」

「まうまう。みえるんじやな。まうまう。お主は、なぜ生きてる
んじや?」

「はーい?」

第3話 ～少年と少女の事情～（後書き）

今回はちょっとシリアルアスでした。

この話から、だいぶ方向が変化します。

でも、作者の意図は、どちらかといつと初めから靈とか、スピリチュアルとか、

そういうのを用意していましたので、ようやくここで主人公が用意されるといったところですね。ちょっと遅いですね。

アニメ系になるかもしれません、「現代の生き方を問う」「いつ大それた主題は忘れないようにしたいと思います。

ではでは^ ^

筆者コ一ナ一

今回の紹介はベルダンディーです。

漫画です。

漫画のタイトルは分かりますか？

名作ですね。

森里恵一のサイドカーつきバイクがいいですね。

第4話 ～普通じゃない生活の始まり～（前書き）

第4話になりました。

細かいところを書いていると、話といつのばは進まないものですね。
気長につきあつてもらえればと思います。

では、どうぞ。

ちなみに、タイトルを考えるのはなかなか苦しいことがあるのだが、
あまりにも内容と合つてなかつたら、具体的な例を沿えて教えてく
ださい。 へへ
では、第四話をどうぞ。

第4話 ～普通じやない生活の始まり～

「どうこういとですか？」

自然と話せるようになった。体を縛り付けている感覚もだんだんとなくなった。

「わしを、誰だと思つ？」

「あの、靈とか、そういう感じのものかと。」

「うーん。まさこ、それ。」

「それなんだ…。ははは。」

「ちなみに、わしは、おぬしの守り神といわれるものじゃよ。」「ええー。そ… そなんですか。」（もっと美人の人人がよかつた。）

つて、この人、人の心がよめたりするんじゃないのか？）

「そうじや。そう、心も読める。ということじやよ。まあ、形は、おぬしの思いによつて変化するが、おぬしがこの形を望んだんじやよ。」

「ははは…」（まじっすか。頭がこんがらがりそう。何で居るんすか？）

「平たく言つと、ああ、おぬしの言つた、なぜ居るのかといつ聞いて、だが、…お主に、ちと、使命を与えにな。」

「使命？なんですか？」（真実味があるような、ないような。夢、夢じゃないよな。爺さん以外ははつきり見える。）

「虚無きょむという物をしつてあるか？」

「むなしさのことですか？」

「そうじや。虚無きょむとは、おぬしの中にも存在する。人間誰しも虚無がある。」

「はあ。」（いきなり何を言つんだろ？。いや、なんとなく分かる気がする。最近良く考える。自分がどうして生まれてきたのか。何にならうとしているのか。）

「つむ。お前たちが生まれてくる意味、使命、人にはそれぞれの役

割がある。しかし、ここ何年かの間に、人々の心は虚無におおわれ、悲しみが心を満たすようになった。」

「やうなんですか。」（自分の中にもある虚無、あんま、意識したことないな。）

「虚無か、どこでも感じられる。何をしていても面白くないと感じたり、人の会話を恐れたり、自分を隠したり、または暴力的になつたり、そして、最たるもののは生きる意欲の欠乏じやよ。」

「生きる意欲の欠乏？（はつ、サトミ…）自殺？」

「難しい話になるが、虚無が心の中で拡大すれば、自ら命を絶つと、いう行動をとる。これは人間の知能が著しく発達してしまつたゆえにもたらされる」ともある。ただし、本来は生命力にあふれ、生きる力をもつて生まれてきているはずなのじや。」

「どうすればいいんですか？」

「わしがおぬしに特別な田を『えてやる。なあに、簡単なことじやよ。虚無を見つけ、その原因を解決してやるのじや。それじや、いぐぞつ…』

「ええっ、まだ何も…（言ひてないぞ…）」

「…さて、起きて、神崎君、神崎君…。」

「う、なんだ、いい香りだ。この香水のは…。

「はつ、浅井先生。つつ。」

「大丈夫？やつぱり、まだ調子悪かったの？今日はもうお家に帰ろうか？」

「いえ、大丈夫です。（お家って、小学生じゃないんだから。）」

「あら、神崎君、その田、びつじたの？」

「えつ、田？」

「青いわよ。」

第4話 ～普通じゃない生活の始まり～（後書き）

ミコトの目が青くなっちゃいましたね。

別に青かろう赤かろうがそのままだろうがどちらでもいいのですが、個人的に変身系が好きなのでこうしてみました。

まあ、それで何かと細かい設定に苦労してしまいますが・・・。是非、一言いでのレスお願いします^ ^

筆者コーナー

前回の問題の答えは

「ああっ、女神様」です。

あののんびりとした世界観が好きです。

今回のお勧めは、

「トランسفォーマー」

です。あのCG処理はすばらしいです。一押し映画です。

第5話 ～青い田のリト～（前書き）

第5話です。

伏線が多くてすみません。
気にしてください。

個人的には、第10話あたりまでは、身辺整理のようなものです。

第10話あたりからバトル系も入ってきます。

どうなつていくのでしょうか？

作者も心配ですが、「現代の生き方を問う」という主題を忘れない
ようにがんばります。
(まあ、そんなことを考えずに読んでください。ただの漫画ですね
＾＾；)

第5話 ～青い田のマーク～

（ほんとだ。青い。あの爺さんか。おい、守り神のおじさん、聞こえるか？おいつ。これは何だ？おいつ。返事をしてくれよ。）

「つーん。それは無理ポン。」

「無理ポン？」

「えつどりしたの？神崎君？無理ポンなんて？かわいらしこじと書うのね。」

「いや、なんでもないです。」

（おーおー、今日はどりこじと田だ？どりこじと面るかな？ほんほんは？）

「あつ、この田ですか？実は、カラー・コンタクトしてたんですよ。」「えつ そうなの？わざわざ黒に？どりじて？かつこじにじゃない。」「いや、なんていうか、その、うちのひいじいちゃんが、外人で、たまたま、自分だけこんな田の色になっちゃって。（うまこうそだな…。）」

「そうなの？カラー・コンタクトは？」

「えつ、ああ、ポケットに入れました。（入つてないけど。ばれる

ぞ…）先生には、元の田をみてほしくて…。（もう、やけくそだ…）

「くそつ、先生を見れない、絶対にばれる。つか、何で俺の田は青くなつたんだよ。」

「それは、あなたの守り神様のカラーだポン」

（ふつ、幻聴が聞こえる。ポンポンは、後で見つけてあげるから、ちょっとだまつとつてくれよ！ほんと、訳がわかんないぞー！）

少しづつ田線を上げると、浅井先生の背後に黒い影が田に付いた。

「浅井先生、」

「えつ、何？」

「言わないほうがいいポン。」

「こえ、なんでもないです。それじゃ、だいぶ楽になつたので、教室にもどります。」

「あいら、そうね。でも、もう、ホームルームの時間よ。今日はもうこれで帰つたほうがよそうね。」

そうだ。このまま外を歩きたくないな。どうしようか?…とりあえず、

「ありがとうござました。それじゃ、もどります。」

「そうね。また、いつでもいらっしゃい。ウハウ。」

「照てるんだポン。」

廊下を歩くミコト、それにふわふわついてくる見たこと無くなる小動物。

(人間つてすごいよな。免疫つていうのか、慣れると、どうってことないよな。動物がしゃべるうが、浮いてよつが、透けてよつが。)

「あのや、ポンポンは、何?」

第5話 ～青い田のリバート～（後書き）

主人公のサポートキャラ（？）のポンポン登場です。
新キャラが少ないか多いか分かりませんが、
作者が覚えきれないでそんなに出さないと思います。
いつでも感想お待ちしています。

筆者コーナー

サポートキャラっていいですよね。
ドラえもんなんて、まさにそれですね。
召喚とかも好きです。

マニアックな作品で書つと、

「神様のつくり方」という漫画も好きです。
神様系とか嫌いじゃないですね。
女の子がどんどん強くなつていきますが、
ご愛嬌です。

第6話 ～その名はポンポン～（前書き）

こんちは、作者です。

たまに振り返って自分のを読んでみると、
全然だめな文章ですね。

まあ、ちょっとはいいところがあるだろ？と思つてこらから
書いているわけですが。

ポンポンとミコトのやり取りです。

なぜミコトが見えるようになったのかは、今のところ使命といつ
とでお願いします。

もしかしたら、もっと深い理由を後々書くかもしれませんがあ…。

第6話 ～その名はポンポン～

「失礼ね。僕の名前はポンテ・ポンタ・ラクリマス・リータだポン。

「あー、じゃあ、初めのまゝひとつで、ポンポンでいいよな。」

(もしかして、これも、守り神?)

「アーティストの才能を引き出す」

らなきや二二三つで、其の中にせいろい

『新編 金瓶梅』卷之三

۱۱۰

卷之三

「うん。 そうだポン。」

と、おじいさんをじっくり見てるのに

うん、言っても難しいから、また今度にするボン

「アーティストの才能を発揮するためには、必ずしもアーティストとしての経験や知識が求められる。」

「じゃあ、ポンがフィルターになつてやるポン。」いやつて、これ

（三）「アーティスト」の「アーティスティズム」

(なんて自分に甘いんだ…本当に守り神なのか?)

「御子の御心」の御心

「あつ、ごめん。」

「トモ、心が読めるポンポンにひび」と思つてしまつたと思

い、後悔し、ポンポンをなでようとした。瞬間、

「ポンー。」

ポンポンの体が薄青色に輝き、ミコトを包み込んだ。

「あつ、…あつたけー。そう。この感覚。ポンポン、本当に、おれ、守つてくれてたんだ。」

自然と体があつたかくなる。この感覚。苦しいときや、つらいとき、胸が締め付けられたとき、布団中入つて、涙を流した後に、何度も何かに体がつつまれた気がした。ポンポンだったのか？」

「いや、守り神なんだから、ポンポンじゃ、失礼だよね。ポンポンサンか？」

「ポンポンでいいポン」

「どう？わかつたポンか？守り神は、何があつても、憑いている人の支えになるんだポン。それは、絶対なんだポン。」

「そうなんだ。心強いよ。でも、じゃあ、どうして自殺をする人がいるんだ？」

「さすがミコト、勘が鋭いポン。」

「何でだと思うかポン？」

「なんでだろ？守り神がついていない人がいる？とかかな？」

「うーん。鋭いポン。」

「ポンポンも人と一緒だポン。何かを食べないと生きていけないポン。」

「食べる？何を食べてるの？」

「『想い』だポン。特に、あつたかい『想い』だポン。」

「へーそうなんだ。」

「そつなんだポン。あつたかい想いつていうのは、…うーん、うまくいえないポン。」

「でも、すごいよ。ポンポンは。そんな、人を幸せにする力があるて。つていうか、今まで守つてくれてたんだよね。ありがとう。」「ヒヒヒー。いいつてことポン」

第6話 ～その名はポンポン～（後書き）

ポンポンのような守護神が、全ての人にとっての「いのち」は、

これは個人的に作者が信じている世界観です。

文章は滅茶苦茶ですが、この世界観を体感してもらえばと思います。

次の次の次の話あたりから、ミコトが新しい能力に目覚めてきます。新キャラ（女）も、もうすぐ登場予定です。

筆者「コーナー」

今回のお勧め？は

エヴァンゲリオンです。有名ですね。？がついたのは、25・26話の終わり方が訳がわからないということです。つつこみどりにも満載のアニメではなかつたかと個人的には思っています。テレビアニメとしては革新的でしたよね。

是非、続きを放映して、すつきりさせてほしいですね。

第7話 ～動き出した歯車～

ミコトは誰もいない教室に戻り、帰り支度をした。

結局ミコトはカラー・コンタクトを入れることにした。深く帽子をかぶり、眼鏡屋に行つた。

(あーあ、財布の中身が空っぽだ。せつかく溜めておいたのに。でも、これで家で変なこと聞かれなくて済むぞ。)

あれから、少し考えた。自分は守り神の爺さんに、虚無が見える目をもらつた。確かに人間多少の違いはあれ、黒い影がみえる。きっと、あれが虚無だろう。

「うーん、あれくらいならいいポン。放つておいた方がいいポン。」「そうなの。ってゆうか、どうすればいいのかなんて、聞いてないけど。」

「そうそう、一つ、注意してほしいポン。虚無は、全部が全部悪いわけじゃないんだポン。だから、少しは虚無を残しておかないといけないんだポン。」

「残すつたつて、虚無の取り扱い方なんて知らないぞ。あの爺さん、いや、守り神のおじい様は、何にも言わずに行つちやつたからな。」「ミコトの体に、どこか変わったところはかいカポン?」

「いや、うーん、別にないけど。目以外は。」

「そつかポン。きっと、大丈夫だポン。それより、ミコトに心してほしいことがあるポン。」

「何?」

「ミコトは、黒い影が見えるつて言つたポン」

「うん。だつて、爺さんがそうしてくれたんだる。その割には、放つておいていいつて言つし。良く分からぬよ。」

「うん。そこなんだポン。ミコトは、これから、虚無と戦つことに

なると思つんだポン」

「虚無と戦う？あんな影と？無理無理。つてか、おそつてくるとか、そういうの、ぶっちゃけやめてほしいな。」

「残念だポン。虚無は、きっと、今のミコトを襲つてくれるポン。」

「黒い影が？そんなように見えなかつた。」

「黒い影とは、ちょっと違うポン。虚無は、確かに誰にでもあるんだポン。でも、虚無を自然界の力以上に膨らませるやつがいるんだポン。」

「それって、悪霊の仲間とか？」

「まあ、そんな感じポン。ポン達は虚無羅きよむらつていいているポン。それは、影ではなく、実際に形をもつていてるんだポン。だから、やばいのはすぐに分かるポン。」

「そうか。それに憑かれてる人をさがして、そいつをやつつけばいいんだ。」

「うーん、そんな感じポン。」

「で、どうやってやつければいいの？」

「うーん、ポンが知つてるのは、まずは引き離して、虚無羅きよむらに触れて、呪文を唱えるんだポン。」

「襲つたりはしてこないのか？」

「ポンが知つてている限り、かなり襲つてくるポン。」

「心が読めるから、正直に言うけど、やりたくないな。」

「そんなこと言わないポン。虚無羅きよむらに憑かれた子は、事件を起こしたり、自殺したり、いいこと無いポン。それに、虚無羅は、…。ううん、なんでもないポン。」

そんなことを話したり、考えたりしながら、すでにご飯を終わらせ、シャワーを浴び、寝る仕度をしていた。

(そつか、でも、安心したことは、うちの家族には虚無羅は憑いてないってことだ。さすが、守り神がいてくれることだけはある。あれ、呪文とか言ってたよね？言えるのか？全然知らないぞ。まあ、

明日、聞け。ああ、やっぱり、いつやつて目に見えたと、全然違うな。あつたけー。ポンポンが守ってくれてんのかな?サンキュー。おやすみ、ポンポン。)

第7話 ～動き出した歯車～（後書き）

こんにちは。作者です。

人の影つてなんなんでしょうね？

この説明は少し苦労しました。

みんな心の影の部分はあるので、それが見えたらいつ仮定で作りました。

分かりやすいように、虚無羅という存在も作りました。

次回は、この虚無羅が出てきます。いわゆる悪役ですね。

悪役としては魅力が無いですが、魅力の有る悪役は後々登場予定です。（MAYBE・・・）

筆者コーナー

みなさん、「シャーマンキング」って、知っていますか？そう、靈が乗り移つたりする漫画です。

あれも嫌いじゃないですが、個人的にはあの人気が描いた、前作の「仮ゾーン」がかなり好きですね。仮像の世界に惹かれました。

第8話 ～人の影に住む者～

「おはよつ。ポンポン」

「おはようポン。」

「なあ、不思議に思つんだけど、ポンポンが見えなくなるときはあるの？」

「うーん、多分、まだずっと見えるポン。」

「なんで、他の子には見えないんだ？」

「うーん、そりや、見えないのにこしたこと無いポン。誰だつて、見られてたら嫌なときはあるポン？」

「はは、そりやそうだ。でも、ほんと、どうして自分なんだろう？」

「まあ、いろいろ理由はあるポン。それに、ミコトだけって訳でもないポン。」

「えつ、そうなの？」

「そうポン。見える人や使える人、呼べる人とか、いることはいるポン。」

「へえ、そなんだ。」

「今日は、学校へ行くポン？」

「そうだけど。」

「氣をつけてポン。人が多いってことは、それだけ虚無羅きむらがいる可能性が高いポン。」

「そつか、この前は人目に付かないよつ、すぐ帰っちゃつたもんな。で、もし虚無羅にあつたら、どうすればいい？」

「うーん、うーん、どうしよう? わかんないポン。」

「だいじょうぶかな、おれ。じゃあさ、虚無羅が襲つてくると、どうなる?」

「きっと、痛いポン。今、ミコトは見える状態ポン。そして、ポン

にも触れるほど強い感覚を持っているポン。こうこうひといとは、きっと、襲われたら、痛いポン。」

「うひ、痛いじやすまなそないうい方だぞ…。でも、ポンがついてるから、大丈夫だよな?」

「何言つてるポン?ポンは、ミマトに話すことは出来るナビ、ミマトがやられたら、ポンも消えてなくなるポン。」

「えー、守り神だろ?」

「それとこれとは、話が違うポン。」

「ああ、学校へ行くのが嫌になつてきた…。唯一の救いは、虚無羅を見たことが無いってことかな。実感無いから、今はあんまりこわくないけど…ポンポン。死んだりすることとかないよね?」

「じめんポン。多分、大丈夫だと思つけど、無いとはいえないポン。」

（ふつ、そうか。使命が与えられて、ちょっと特別だつて思つてたけど、参つたなあ。なんか、それほどいい役をもらつた気がしない。どうか、虚無羅がポンポンみたく弱そつでありますよつこ。）

「ポンポンみたいには余分だポン!」

「ああ、じめんじめん。」

「それじゃ、いつときまーす。」

「いつてらつしゃい。氣をつけてね。」

第8話 ～人の影に住む者～（後書き）

いよいよバトルモードの助走段階です。

ポンポンとのやり取りが多いですが、『愛嬌です。

次回はいよいよメインとなる新キャラ登場予定ですーー！

筆者コーナー

バトル系といつたら、やっぱりセイント聖ですか。今のチャンピオンでやっていますね。今のは見ていませんが。鎖使いの名前なんでしたつけ？ネビラチーン！
セイントクロスかっこよかつたです。

第9話　～登校～

第9話　～登校～

虚無(きよむ)が「見える」よになつてから、初めての学校。いつものよう自転車にまたがり、わずか1~2分の道を風を切るように学校へ向かつた。やはり、行き交う人には、黒い影が見える。しかし、その影も多少の差はあれ、気にするようなものではなかつた。

「なんだろ？怖いはずなのに、すこしどきどきして。虚無羅(きよむら)に会いたいのかな？いや、会いたいとこよりは、見てみたいって感覚だな。きっと。」

「ポンもよく分からぬポン。虚無羅を成仏させてあげられれば、苦しんだり、悩んだりする人が減るポン。だけばやつぱりポンも怖いポン。」

「おじおい、守り神様がそんなこといつてどうするんだよ。」

左手に正門が見える。いつものように駐輪場に自転車を置き、ふと顔を上げるミロア。校舎に田をやる。階段をあがつた一階が玄関になつている。

（ああ、学校が休校になつて、翌日倒れて保健室。それが昨日。そして今田か。なんかいろんなことがありすぎて、なつかしくかんじるぜ！まあ、みんなに影がついて見えるつてこと以外、いつもと変わらないか。そうだ、シンジは来てるかな？昨日の朝、会つたときには、やっぱ少し元気が無かつたようだからな。シンジの自転車は、まだないか。いつもは自分よりも早く来ているはずなのに。）

「神崎君、おはよう。」

ふと後ろから声をかけられた。同じクラスの山口ミキだ。背が高いけど裏表の無い話しやすい子だ。身長は170センチ弱だろう。自分がぎりぎり170センチを超えた172センチだから、自分はこの子より大きいことが少し嬉しい普通の高校2年生だ。

「ああ、おはよう。」

ミキの笑顔と明るい声に少し顔が紅色に染まってしまう。

「やっぱり、見てるんだよな？」

「気にするなポン」

「別に、好きって訳じゃないけど、やっぱ、女の子に弱いつていうか、かわいいとは、思つけど…。」

「知ってるポン。いいポン。健全だポン。」

「それより、一つ思い出したポン。虚無羅きょむらに会つたら、皿を呑ませないようこするポン」

「まじ？ 皿が呑うと石になつたりするのか？」

「石にならなにかと、ミミツの皿は氣付かれるポン。襲つてくるといふことポン。」

「ああ、いい忠告をきいたよ。絶対氣をつかる。つていうか、逆に、皿を呑わせなければ、大丈夫つていうこと？」

「おそらく、相手は気がつかないポン。相手は、どちらかとこりど、本能で生きているよなもののポン。」

「今のところ、いないよな。」

「大丈夫。いないポン。」

第9話 ～登校～（後書き）

すみませんでした。

山口ミキは、フルネームを使ったのですが、かなりのサブです。
メインキャラは次回です。ごめんなさい。

筆者コナー

今回の紹介はバンプオブチキンの「アルエ」です。
白いブラウス似合う女の子～から始まるアップテンポのリズムと
いやらしくないひびきのよい歌詞が好きですね。

第10話 ～出会い～

「学校にいるだけで、こんなにそわそわするなんて思わなかつたな。」

「自転車をおいた二人（一人と一匹）は、一階に上がらうと階段に足をかけた。そのとき、今来た駐輪場のほうから、珍しく悲鳴が聞こえた。」

「きやー。」

「どうしたんだ。」

登校をしたばかりの生徒が集まつてくる。

「何を見てんだよっ。おう、もつ行くぜ。どけよっ。」

この神城高校かみじろにしては珍しい、いわゆる不良だ。1年生と思われる少女が一人、殴られた形跡けいせきもなく、倒れこんでいた。

それを見て、「くりとつばを飲み込むミコト。」

「あつ、いたポン。ミコト、今の不良グループの肩に乗つてゐるの、全部で3匹。いたポン。まずいポン。いきなり3匹は…。」

「ああ。よかつた。予想してたよりは、まだました。…トカゲっぽいよな。」

3人の不良グループが歩き去つていいくのを見届けるミコト。その肩には確かに黒く異様な物体がそれぞれ一匹ずつ乗つていた。体長は20センチほどだろうか。それはまさしくトカゲの様態をしていた。せわしく人の体を歩き回る影。これが虚無羅きよむらといふものなのかな。3人には影が見えない。おそらく3人の影を凝縮してあのような形になつたと見るのが正しいだらう。

「だいじょうぶ?」

「ありがとう。だいじょうぶよ。ちょっと押されただけだから。」

さきほど倒れていた少女が起き上がる。周囲にいた生徒も安心した様子で、何かをつぶやきながら玄関へと向かい始めた。神城高校

では、珍しい光景だつたのだろう。興奮気味の男子高校生、「なによ、やな感じのやつら。」と不平不満をぶつけている女子高生。いつもと違った情景が見受けられた。

「よかつた。女の子はだいじょうぶそうだな。」

少し遠巻きに見ていたミコトは、ほつと肩をなでおろし、次に何をすればよいかを考えようとしていた。しかし、少女はミコトの方を見つめていた。

（あれつ、どうかしたのか？なかなかかわいい子だな。）

野次馬連中も、その足が教室に向かいだした。なぜか少女はこちらに近づいて来るようだ。少し細身の体で、背もそれほど高くないその少女は、なぜか不思議な雰囲気を放っていた。その少女が、栗色をした肩にかかるかからない位の髪をリズムよくゆらしながら近づいてきた。

「おはようございます。」

その少女は、不意にあいさつをしてきた。（えつ、俺に？もしかして、この子、俺に気があつたとか？）

「ああ、おはよう。」（おつ、なんかドキドキする。）
「すいぶんかわいいんですね。」

（はつ？）

第10話 ～出会い～（後書き）

いつもレス歓迎ですへへ

次回はこの少女の名前が分かります。

かなり物語りに関わってくるので、いいキャラにしていきたいとは思っていますが、どのような性格なのが作者にも分かっていません。エヴァンゲリオンの綾 レイをもうちょっとくだけた感じに考えているのですが・・・。

というわけで、いつものように取り留めの無い終わり方ですみません。

次回も読んでもらえると嬉しいです。

筆者コーナー

ちなみに、エヴァンゲリオンを見たのは最近です。
これもY-TUBEでみました。

今は「ああつ女神様」をみています。

第11話　～緑色の目の中の少女～

第11話　～緑色の目の中の少女～

（ずいぶんかわいい？俺のことか？何をいつているんだ？いや、かわいいのかな、俺。んなわけないよな。…この子のバッジは、確かに一年生だよな。）

神城高校は学年に応じてそれぞれの胸にバッジをつけて識別している。

「ううんっ。君は、えーと、一年生の子だよね。どうかしたの？」

「あなた、名前は？」

（あ…あなた？そ…その聞き方はなんだ？といつか、おれの言ったことが耳に入つてないのか？）

「えーと、いいかな、君は、…」

ふと、その少女が手を伸ばす。不思議なことに先ほどまでぐく普通の目をしていた少女が、明らかに輝きを放つエメラルドの色をした緑の目に変わっている。

「もしかして、君…。」

少女はミコトの目を見つめた。吸い込まれるような深い緑色の目にはミコトはしづらく述べ葉を失つた。なにやら少女は少し笑みを浮かべている。

「はじめまして。」

少女がミコトに話しかけた。落ち着いていて、なおかつ透き通るような声。ミコトはその声にどこか懐かしさを感じずにはいられなかつた。

「ああ、はじめまして。」

（不思議な子だな。なんでこんなに落ち着いているんだろう。しかも、よく見ると肌の色すげー白い。はっきり言って、美人だよなあ。…やっぱつ。見とれてた。）

「私の名前は、山神セイラ。そしてこっちはが、…」

少女の体が淡い緑色の光につつまれ、形を成すものが姿を現した。それはまるでゆうの花のように白く氣高い雰囲気を漂わせていた。

白い羽をもつた天子のような守り神だ。

「おおっ。きれいだつ。」（いつのポンポンとはえらい違いだ…。）

「失礼ポン…！」

「ああ、『めん』めん。」

「ウフフ。ありがとうございます。私の名前はルシアン・ミシハルト・リリイです。リリイと呼んでください。」

「ああ、俺の名前は神崎ミコト。しつちが、えつと…ポンポン。はじめまして。」

「よろしくポン。ちなみに、本当はポンポンじゃないポン。ポンテ・ポンタ・ラクリマス・リータだポン。」

（普通に覚えてなかつた。『めん、ポンポン。）

「あら、かわいらしい名前。初めまして。あなたの守り神は、空の性質ね。」

「えつ、やうなの？」

（なんか、知らない」とぱつかりだな。空の性質つて、冒険者のゲームみたいだ。）

「ええ。わたしもリリイが言つてくれたことしか分からぬけど、それぞれの守り神には生まれ故郷があるらしいの。あなたは、どうして守り神が見えるようになつたの？」

「えつ、どうしてつて言われてもなあ…。どうしてつていわれて、すぐに返せる答えが無いんだ。いきなり爺さんみたいな神様が出てきて、使命を与えに来たとか言つて、それでこの田になつたんだ。君も、虚無きよむが見えるんだろ？」

そう言つてカラー・コンタクトをはずしてみせぬミコト。ミコトの

田もまた、青く輝きを見せていた。

「あなた、カラー・コンタクトをわざわざしているのね。どうして？」

「どうして君はしていないの？と、」あらが聞きたいな。」

「見てて。」

セイウセイ//コトの田を見ながら、その場で緑色の田から、もとの黒い田へと変化させて見せた。

「す…すげー。」

「あら、そう?」

「そんなことできるんだ。」（カラー・コンタクト買つ前に知りたかつた。俺の財布は空っぽさ…ふつ。）

「うん。でも、やっぱりカラー・コンタクト、いいかも。やうか、その手があつたわね。」

「どうこり」と?」

「ええと、まずね、田の色を黒くするには、リラックスタして、心の中で、『もどりていよいよ』って優しく唱えるの。」

「じいか?どう? できる?」

「おおつ。できるポン。でも顔が微妙に怖いポン。」

「仕方ないだろ。優しく微笑んでる感じなんだから。あつ、こんなにすぐできるなんて思わなかつた。すげー。俺つて天才?」

「調子にのらないポン。」

「すじいわ。天才かどうかは分からないけど。でも、やっぱり、集中したり、興奮したりすると、田の色はもどりてしまつ。それに、影も見えなくなるでしょ?」

「あつ、本当だ。虚無^{きゆむ}が見えない。」

走っている生徒に田をやる//コト。いつもまで誰にでもあつた影(じこひの虚無)が見えない。

「その田でも、虚無羅みたいに強い力の影を見ることが出来るけど、力がうまく使えないの。」

「そなんだ。って、力? 力って何?」

「そうね。いえ、あなた、本当に守り神さんから、何も聞いてないのね。それでよく学校へ来れたわね。怖くなかったの?」

「本当だよ。ポンポン。どうして教えてくれなかつたんだ?」

「ポンポンも//コトの力なんて知らないポン。きっと、爺ちゃん

ら知つてるとと思つポンが…。」

「まあ、いいや。きっと、本当にポンポンは知らないんじゃない？」
人間だつていろいろあるだろ?」

「ええ。まあ、いいわ。結局のところ、あなたも私も虚無羅を浄化
するのが目的よね。これからはお互いに仲良くやりません?」

「もちろん。心強いよ。こちらこそよろしく。」

「私は1年B組にいるわ。あなたは。」

「俺は2年B組。同じB組なんだね。」

「そうね。10分の1の確率ね。」

第11話 ～緑色の瞳の少女～（後書き）

新キャラクターの登場です。

彼女が出てきて、話の流れが大きく変わってきます。
ハラハラドキドキ系が多くなるかもしれません。

話の上でつじつまが合っていないところがあれば、教えてください。

筆者コナー

「ブレイブストーリー」漫画も映画も見ました。小説は読んでません。
ん。><

漫画のほうがいいなと思います。
絵がきれいですね。
カバーはミコシヤを思われます。

第1-2話 ～時代遅れ？の一人～

未だに駐輪場で話をしている4人（内、一人は守護神）。

「よしひ。じゃあ、なにがあつたら、…どうすればいい？携帯なん

て、俺、持つてないんだけど。」

「そう。よかつた。わたしも、持つてないわ。」

初めて少し顔を赤らめたセイラ。（おおっ、なんか嬉しい。最近の高校生って（俺もだけど…）ほとんど携帯持つてるからな。）

「まあ、いいや。何かあつたら、直接クラスまで行くか、下駄箱にメモでも入れとくよ。」

「そうね。わたしもそつするわ。あと、これが、いちおう、わたしの家の電話番号。」

「えっ。ああ、じゃあ、俺もわたすよ。」

「いたずら電話じけいやダメよ。」

「へつ？？？」

「冗談。」

「あはは…」

すました顔で言うセイラに、あつけにとられている//コトとポンポン。

「そう、今、一番の問題は、すでに8時10分だとこいつだ。」

「氣を取り直して//コトが言った。

「ええ。わたしも初めてよ。…ホームルームに遅刻するの。」

キーン・ゴーン・カーン・ゴーン

「いそげー。」

無常にも始業のベルが無機質な音を奏でた。走りながら//コトが言つ。

「いろいろ聞きたい」とあるから、昼休み、屋上でどうへ。」

「えつ、ええと、目立たない？」

少し考えた様子でセイラが返した。

「じゃあ、…図書室は？」

「いいわ。」

「じゃあ、昼休み。」

「ええ。」

（なんか、デートの約束みたいだ。しかもセイラ、結構というか、かなり美人だし。…って、すぐこんなこと考えるのはおかしいよな…。）

階段の入り口が2階は2・3年生、1階は1年生と別れていた。階段を上っている途中、一瞬1年玄関を見たミコトだったが、すでにセイラは下駄箱から上靴を出しているところだった。ミコトも急いで上靴をはき、教室へ向かった。すでにホームルームは始まっている様子だ。（まいったなあ。なんて言おう。女の子と話してたなんて言えないなあ。）教室の後ろのドアをゆっくりと開けた。

「すいません。おくれました。」

「どうした神崎。めずらしい。そういうえば、お前、調子は大丈夫か？」

（さすが尾崎。話が分かる。）

「大丈夫です。」

そういって入るうとしたとき、

「理由はどうした？」

（やつぱり聞くよね。）

「すいません。ちょっと調子が悪くて、寝坊してしまいました。以後、気をつけます。」

「そうか、座りなさい。」

謝罪と理由を語りついだが、この学校の、いや、尾崎のルールであつた。

（あれ？、シンジが欠席？ビリしたんだね？）

第1-2話 ～時代遅れ？の一人～（後書き）

どうでしたか？アドバイスお願ひします。

出来るだけ返事をしたいと思いますので、是非感想を聞かせてくださいね。

ちなみに、尾崎のイメージは「アヒルの窓」（マガジン）というバスク漫画の顧問らしき男の人をイメージしました。分かりにくい説明ですみません。

携帯電話は持っていないという設定にしました。たいした理由はありませんが、一人とも携帯を使うようなイメージではなかったので・・・。あとは筆者の趣味ですね。

筆者コーナー

「のだめカンタービレ」も好きです。千秋の突っ込みが好きですね。ドラマはあまり見ていませんが。サークルKに置いてあってたまたま手に取ったのが始まりです。

最初に読者の心をつかむって難しいですよね。
最初が肝心ということを学びました。

第13話 ～欠席の理由～

第13話 ～欠席の理由～

山下サトミが自殺をしてから3日目。その間に色々なことがあつた。色々といふ一文字では片付けられないような信じられない出来事だ。

まずは、サトミの机から声が聞こえたこと。きっと彼女が死ぬ前に経験したり思つたりしたことだろう。その声は悲しみにあふれていた。

そして、気を失つた自分が保健室で見たものは、なんと自分の守り神というものだった。今考えれば、怪しい話だが、実際俺の目の色が光りを帯びた青色に変わつてしまい、しかも人の心の影である、「虚無」が見えるようになつたのだから、信じないわけには行かないだろう。

そして、守り神は一人じゃないらしい。リストのようなふわふわした守り神、えーと、ポンテ・ポンタ…なんとかつていう（ちょっとぴり頼りない）守り神だ。自分はポンポンと呼んでいる。そいつがいろいろと俺に話しかけてくれる。まあ、守り神だつていうことはなんだかすごく納得がいく。こいつがそばにいるとすごく温かい気持ちになれる。

ポンポンの話だと、人には虚無があるけど、虚無の状態ならいいそうだ。しかし、それが強くなつて形を作ると危ないらしい。虚無羅むらといって、憑いた人を自殺に追いやつたりするらしい。

自分はサトミの自殺もなんとなくそいつが絡んでいるように思えてならない。

そうそう、ついさつき緑色の田をしたかわいい1年生にもあつた。名前はセイラ。山神セイラというそうだ。同じように虚無が見え、自分よりも少し詳しくいろいろ知つてているらしい。まあ、それ

は守り神の違いによるものだと思つが…。田の色を黒く戻す方法もこの子が教えてくれた。

その守り神が、これまた神秘的な美しさを持ち妖精のよつな形をしたりリイだ。まあ、妖精自体見たことが無いが、そう形容するのがふさわしいと思つてしまつ。

さて、本題はここから。自分はあまりにも虚無羅について知らないすぎる。虚無羅を浄化させるのが使命らしい。ただ、どうやって浄化させるか知らない。それでどうやって虚無羅と戦えつていうんだよつ！

「はあ～。」

ミコトはため息をついた。（まあいか。さつきのセイラつていう子に聞けば。）やうやつて自分をなぐさめるミコトであった。（そういえば、シンジはどうして今日いないんだろう？）

ミコトは何か胸騒ぎのようなものを感じていた。窓から見る景色はいつもと変わらない。（サトミは何を思つて自殺したんだろ。明るい子だったのに。いや、でも、確かにここ数週間は暗かつたか。ちよつと言葉がきつかつたり、一人でいることが多かつたよな。やっぱり、あの時聞いた声は、サトミの心の声だつたのかな。人が一人自殺をしたつていうのに、本当に変わらないもんだな。自分が死んでも、…いや、そう思つのはよそう。）

「なあ、シンジの休んだ理由、知つてるか？」

「えー、知らない。熱じやないの？」

「あいつ、サトミに告白されたんだって。なつ。」

「うん。サトミの友達が、そう言つてたわ。サトミがシンジ君と話してたと思ったら、泣いて帰ってきたんだつて。」

（おいおい、それは違うぞ。あいつは振られたんだ。）

「それで気まづくなつて来れなかつたのか。」

数人の生徒がこの話題で盛り上がった。なぜかミコトはその中に入って本当のことをわざわざ囁ひ気になれなかつた。

(でも、なんだろう? 振られたシンジがどうして休むんだ? 何かまだあるのか?)

「わたし、事実を確認しようとしてシンジ君に電話したの。そしたら、「えつ、俺はそんなことしない。」なんて答えたの。信じられないって書いてあげたわ。」

「おーおー、それは違う。シンジは本当に振られたんだ。」

「ミコトが立ち上がり話をしている集団に近寄つていつた。

「えつ、ミコト君はどんなことを知つてゐるの?」

「どんなことって、とにかくあいつは振られたんだ。俺もサトミが自殺した後電話で直接聞いたんだよ。」

「あらつ、でも、うそかもしれないじゃない。自分が振つたなんていつたら、原因にされちゃうものね。」

(机から聞こえた声のことを書つか? いや、書つても誰も信じしないだろう。)

「いや、でも、俺はシンジを信じるね。それに、たとえ振つたとしても、それが自殺の原因というわけにはならないだろ。」

「まあ、そうだけど…。じゃあ、どうして休んだの?」

「それは、…本当に風邪ひいたんだ。」

口から出た言葉とは裏腹に、ミコトは不思議な胸騒ぎを感じていた。

「ミコトはまだ知る由が無かつた。サトミを自殺でおこやつたその影(虚無羅)が、今はシンジの体を棲家(すみか)としてこむことま。

第13話 ～欠席の理由～（後書き）

シンジに取り付く虚無羅がでてくるのは、もつかなり先のことです。次は、二人の図書館でのやり取りです。
変な呪文も出できます。
よかつたら覚えてください。

筆者コーナー

オン ロロロロ ～ は仏教の御真言です。仏を表す言葉ですが、この小説ではそういう意味は特にありません。興味のある方は仏教に関するホームページをあさってみてください。色々な逸話などがあって面白いですよ。閻魔様とお地蔵様が兄弟だったり^_^ ちなみに、「仏ゾーン」の千手君が好きです。地蔵君も好きです。阿修羅君も好きです。

第14話　～一人だけの会話～

〃コトは教室の時計を見た。もうすぐ昼休み。先ほどから時間が気になつてしまふがなかつた。山神セイラと図書室で会つ約束をしているのだ。

（昼休み、何を話そ？。聞きたい」とは言ひもあるな…。まづ、今朝会つたとかげの虚無羅きむらをどうするか。どうやつたら浄化できるのか。…あの子はどうして影がみえるよ？になつたんだ？少しきつねうなタイプだよな…。でも、かなりきれいだ。年下か、「神崎先輩」とか言つてくれるのかな？ああ、でも、さつきは「あなた」なんて呼ばれたな。旦那じやないつてのに、まつたく。でも、かわいいよな。・・・）

「起立、礼。」

（よし、そろそろ行くか。）

図書室へ移動する〃コト。頭には普通の生徒には見えないポンポン（〃コトの守り神）がのつている。昼休みになつたばかりなのに、ご飯を食べていないのであるが、5・6名の生徒がすでに図書室にはいた。奥に入つていくと、すでにセイラはテーブルの上にノートを開き座つていた。

「やあ。」

声をかけて隣に座る〃コト。

「ええ。」

少し照れているのだろうか、顔を少し紅潮させながら受けなく

答えるセイラ。

「昼飯は食べたの？」

「まだよ。あなたは？」

「まだ。…そつか。じゃあ、さつと話しがして、『飯食へなきやね。

』…しまつた、早く会話を終わらせたいよ？」聞こえたひやつたかな

「

?)

「ええ。 そうね。」

(ええ、 そうねって…。 やつぱ俺のことなんとも思つてないか…。
まあ、 今朝会つたばかりだもんな。 そのほうが当たり前だ。)

「あのさ、 今朝の3人組についていたトカゲ、 まづはあれをどうするかだよな。」

「そうね。 … まづは、 あの虚無羅きゆむらを本人から引き離さないといけないわ。」

「どうやつて?」

「虚無羅が憑いていいる本人に触れて、 被詞はりことを唱えるの。」

「祓い詞?」

「ええ、 きっとあなたも使つよつになると思つて、 紙に書いてきた
わ。 少し長いわよ。」

先ほどのノートを定規できれいに切り取り、 ノートに見せるセイ
ラ。

「もろもろの… まがご」と… つみけ・がれあらんをば…、 、 ん?
なんて書いてあるんだ?」

「ひついうのよ。 ‘もろもろのまがごと’ つみ、 けがれあらむをば
はらえたまい キよめたまくと もつすことを きこしめせと
かしこみかしこみ もうす、 いい?」

「うーん、 これは、 何度も練習がいりそうだな。」

「意味を覚えれば簡単よ。 もろもろとこうのは、 意味はそのままよ。
色々なとか、 そういう意味ね。 まがごと、 つみ、 けがれがあつたら
お払いしてください。 清めてください。 そう言つているのよ。」

「なんだ。 すごいね。 … 本当にそれで大丈夫?」

(ほんつと、 こんなことぜんぜん知らなかつたぞ。 この子に会わな
かつたらどうしてたんだろ。 …)

「ええ。 きっと大丈夫よ。 しつかりと念じてね。」

「この詞じが通じれば、 虚無羅は本人から離れて、 きっと私たちを襲
つてくることになるわ。」

「どうして？」

「この詞を唱えると、虚無羅は唱えた人がいなくならない限り、1日～10日ほどで浄化されるの。：浄化といつても虚無羅にとつては死を意味するようなものだから必死だと思うわ。…」

「そつか。なんか、かわいそうだな。というか、相手もこっちを殺す氣で襲つてくるよな…。逃げ切らないとダメってことか。」

（はは…しゃれになつてないじやん。まあ、あのくらいのトカゲなら大丈夫だと思うけど…。火ふいたりしないよな？）

「あとね、浄化期間を待たなくとも浄化できる方法があるの。」

「どんな？」

「さつきと同じことを虚無羅相手にするの。虚無羅に触れながら、祓い詞、を唱えるの。3回ね。」

「そうなんだ。その方が相手に追われるよりも気は楽かも。」

「そうね。でも、逃げたほうが安全の場合も多いと思うわ。ただ、注意しないといけないのは、虚無羅は物体を通り抜けることが出来るの。だから、家の鍵を閉めても無駄よ。」

「へえ…それは、きびしいね。…じゃあ、ますます祓い詞を唱えるしかないな。」

「でも、虚無羅にも物理的な力が働くものがあるの。簡単に言うと、靈的な力が宿つているものよ。もちろん、靈つて言つても死んだ人がなつたりする靈じゃないわ。精靈の力、自然界が生み出すには見えない力の源のことよ。自然界の植物などには、少なからずそういう力が宿っているわ。リリイが言うには、マナっていうらしいのつまり、私たちが虚無羅に触ることが出来るのも、半分はマナの力を得てるってことなのかも知れないわ。いえ、マナの力が強まつたというべきかしら。」

「セイラ、本当によく知ってるね。」

「リリイが教えてくれたから。」

「うちのポンポンもいいやつなんだけど…。」

「「めんポン」

「『氣にしない氣にしない。』

「そうですね。守り神にもいろいろな役割があると聞いたことがありますわ。」

リリイにやう言われ、少しほつとしたポンポンであった。

第14話　～一人だけの会話～（後書き）

説明的な会話文が長くてすみません。

マナのエネルギーが、この世界のキーワードの一つですね。
まだまだ話は続きます。

寛大な心で見てやってください。

筆者コーナー

「ああっ、女神様」って、もう20周年を迎えるんですね。本当にすげーです。名作ですね。アニメもなかなかよくできています。「OPEN YOUR MIND」の歌が牧歌的な響きで好きです。皆さんの好きな歌や漫画は何ですか？良かつたら感想に付け加えてくださいると嬉しいです^_^今の読者数ならかなり返信できると思うのでよろしくお願いします。

第15話 ～踏み出した一步～

図書室での//コトとセイラの話は続いていた。

「なんか、虚無羅^{きむら}の浄化の方法がわかつただけでも、かなり胸のつかえがとれたよ。ありがとう。」

「い、いいえ。わたしは知つてることを話しただけだから。」

セイラの表情が少し照れているようにも見えた。

「あのせ、セイラってよんでもいいかな？」

「…どうして？ええ、もちろんいいわ。…あなたのこと、なんて呼ばばいいかしら？」

「うーん、まあ、普通は神崎先輩とかだるうと懇つけど、そうだな、これから一人で鬼退治と決めこんだことだし、//コトって呼びなよ。」

「…//コト…ええ。分かつたわ。」

「それじゃ、あの」とば、祓^{はらい}い詞^{こと}、覚えておくよ。今日の帰りにでもあの3匹を捕まえようか？」

「…そうね。いえ、無理をしないようにしましょう。私もそれほど経験があるわけではないの。できれば一体ずつがいいわ。」

「じゃあ、部活が終わつたら、もう一度会える？」

「部活？あなた、…ええと、//コトは部活に入つているの？」

「ああ。親父がうるさくて。剣道部。これでも次期主将つて言われてるんだぜ。大会も近いしな。」

「そう…。」

「どうしたの？」

「いえ、わたし、部活に入つてないの。授業後の部活の時間が主に虚無羅に対する活動時間だつたから。」

「…そうか。そうだよな。…」

(どうする？剣道をやめる？)

(やめられるか?)

(今、やめないと……)

「やうだな。もひ、悠長に部活はやつてられないか。なんてつたつて、自分にしか出来ない、使命、だからな。」

気になることはあつた。部活の仲間。シンジもその一人だ。しかし、いつまでも部活をやつしていることは出来ないだろう。この先、本当に高校生として過ぐせるのかすら、アコトは不安に思つていた。

「先生、ありがとうございました。…やめる理由ですか?今は、まだ何も言えません。」

「…そうか。残念だ。」

まっすぐに剣道部の顧問を見つめるアコト。ただし、剣道部顧問といつても、剣道をやつていたわけではない。たまに来て見ていくといづくらいだ。顧問の先生もアコトの田を見て、これ以上何をいつても無駄だということを理解したのだろう。

(そつか、ここではもう練習はできないんだよな。) 放課後、武道場に立ち寄つたアコトは、感傷に浸つていた。ふとアコトの田の一筋の雫が流れた。武道場に一礼をした。静寂がアコトをつつむ。涙があふれてきた。制服の袖で涙をぬぐい、武道場を後に、アコトはセイラの待つ、1年B組にむかった。

第15話 ～踏み出した一歩～（後書き）

剣道部だつたんですね。

部活に入っているのが一般的だと思い、入らせました。

やめる決断力。筆者が話の都合上、掛け持ちは無理だといつことで即決めました。

ちなみに筆者もスポーツは好きだし、スポーツ系の漫画も好きです。マガジンのバトミントン漫画や、「オーバーボードライブ」という自転車漫画も好きです。

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございます。子供から大人まで幅広く読んでいただけたらと思います。これからもどうか応援お願いします。

是非感想をお寄せください。できる限り返信いたします。

第16話 ～使命の重み～

「本当に部活やめてよかつたの？」

「ああ。大丈夫。やらなきゃいけないことがあるだろ。『ひがひがひがひが』。

「

「そうね…。」

少しうつむいて、わずかだがこちらに笑顔を向けた。慈しみに似たその表情は、ミコトの胸を高鳴らせるのに十分であつた。使命の重さを肌で感じているミコトであつたが、躊躇無く退部してきたことは、やはりセイラの影響も大きかったのだろう。

二人はさっそく行動を開始した。

「初めてっていうのは、どきどきするな…。」

「安心して。わたしもどきどきしてるから。」

そう言つて歩き出すセイラ。肩を並べて歩くミコト。遠くから見れば二人は付き合つているようにしか見えないだろう。向かう先には今朝の不良3人グループの中の一人がいた。

「今日はあの子の影をやりましょう。きっと、一人なら大丈夫よ。」「だといいね。…虚無羅きよむらは、じつちが近づいたときに襲つてきたりはしないのか？」

「するかも知れないわ。…わたしが、虚無羅を本人からひき離すから、あなたはあの人に触れて祓詞はらいじゆを唱えてくれる？」

「ああ。分かつた。」（とはいふものの、だいじょうぶか？）

「…もうものまが」と、つみ、けがれあらむをばはらえたまいまよめたまへと もうすことをきこしめせとかしこみかしこみ もうす、でいいよな？」

「ええ、よく覚えたわ。」

「必死だからな。」（そつ。必死だけど、少しづくわくしている。なぜだ？ 本当は怖いはずなのに。）

「気をつけるポン」

ポンポンが話に入ってきた。守り神達は一人が話しているときはよほどのことが無い限り話に参加をしない。（「ポンポンは守り神ポン。本当は人間同士で話をするのが一番ポン。」って言つてたな。よっぽど心配なんだな。なんせ俺の初仕事だから。）

「ああ。ありがとう。」

「ちゃんとポンポンも守つてあげなきゃだめよ。」

「えつ、ポンポンも襲われるの？」

「ええ。そういうこともありまするわ。」

「なんだか大変そうな仕事になりそうだ。」

そうするうちに人通りの少ない神社の近くまできた。

「ここで勝負をしかけましょう。」

「そうだな。ここになら少しいくらい怪しい動きをしても大丈夫そうだな。」

「うふつ。そうね。頼りにしてるわよ。私が影を引き離すのはだいたい1分間よ。後はしつかりお願ひね。」

そういうとセイラは走つて前の不良生徒に近づいた。近くで囁く。

「オン コロコロ マカリシェイ ソワカ。オン コロコロ マカラシエイ ソワカ。」

何かの呪文だろうか。トカゲ虚無羅ひむらにすぐに変化がおどされた。

第16話 ～使命の重み～（後書き）

いよいよバトルモードにならざりました。
制約の多い戦いで、非常に書きづらいですが、
自分が決めしたことなので頑張ります。

筆者コーナー

小説を読もうの中では、「厄神様はかくかたりき」が好きですね。
読者数は圧倒的に違いますが、コメディーって言うジャンルもいい
なあと思いました。ちなみに、この小説のジャンルがファンタジー
っていうのもいいのかどうか分かりません。（違うよね・・・。）

次回もどうぞ見てやってください。

第17話 ～初仕事～

セイラがトカゲ^{虚無羅}の近くでなにか不思議な詞を唱えると、その黒く禍々（まがまが）しい物体は鋭い眼光でセイラをにらみつけた。まるで目の前の餌をとられた獣のように、セイラに向かつて走り出した。遠くから見えたおよそ小さな虚無羅であるが、幾分か実態が大きくなっているように見える。駅のほうへ向かう不良男とは別に、セイラはひとつそりとたたずむ神社のほうへと駆け込んでいった。それを追つていく黒いトカゲ。体長は50cmほどだろうか。頭には耳が三つあり角のようなものが3本生えている。アンコウのように大きな口に鋭い牙。（おいおい、あんなのだったか？聞いてないぞ…。）うつすら冷や汗が流れるのを感じた。

「ミコト、お願ひ。」

一瞬、何をすればよいか忘れてしまった。あのトカゲの様子に少し引いてしまった自分がいる。（ちつ、だてに幽白書は読んでないって。）

黒い影は細い糸のようなものを本人に残している。（きつといつがまだトカゲが不良生徒に憑いている証拠だな。）

「ええいっ」

そう言って、走りこんだミコトは前にいた不良生徒に両腕を回して抱え込んだ。ただ、その様子は後ろから抱きつきに行つたよつにしか見えない。

「なつ、なんだお前っ！」

滅茶苦茶におどろいている不良生徒は、あたりまえだがミコトを振り払おうとする。

「気持ち悪いんだよつ！」

相手も必死だ。全力で振り払おうとする。

「もうもうのまが」と、つみ、けがれあらむをば はらえたまい

きよめたまへと むつすことを わいしめせと かしこみかしこ
み もつす、」

次の瞬間、男とトカゲを結んでいた黒い糸は一瞬光り、パツと消えた。スマートな方法ではなかつたが、//コトの選んだ抱きつくという方法は、「相手に触れながら祓詞ほらいことを言わなければいけない」という条件の下では案外有効であった。もし一瞬でも離れてしまえば、その詞は力を無くしてしまつのである。

(よし、次はトカゲの浄化だ。)

「なんだよてめえは！」

‘がこつ、と鈍い音がした。顔面をなぐられたのだ。（しまつた、
氣を抜いた。）鼻が熱くなり、血がたれている。

「つきしょー、お前のためなだつつうのに。」

悔しさ紛れに相手の腹にけりをいれ、口を押さえ//コトも神社へと駆け込んだ。

(くつ、あいつ、追つてくるか?)

運のいいことに、蹴られざまに倒れこんでしまつた不良生徒は、ふだんなら追つてやり返さないと取まらない怒りの矛先をなんとか収め、いつもは感じられないすがすがしさに不思議を覚えていた。追う氣にならなかつたのだ。

「ちつ、こきなり仕掛けてきたのはてめえだろ。」

そう言つと、すつと立つて駅のほうへ向かつていつた。

「なんでだらづ？今までの重苦しい気持ちがどつかへ行つたみたいだ。」

第17話 ～初仕事～（後書き）

次はセイラの力です。
個人的には、これからが面白いと勝手に思っています。
どうぞ。

筆者コーナー

好きな漫画と云うより、どうしても続きが気になってしまるのは、
富樫氏の「ゆづゆづはくしょ」とか、「はんたーはんたー」とかで
すね。

個人的には、残酷な描写はどうかと思うときもありますが、あの
思考や世界観やキャラクターの魅力はすごいですよね。

第18話 セイラの力

（セイラは大丈夫か？）気に留めていたことは二つあった。一つは、影（虚無羅）を本人から引き離さないまま浄化すると、本人は死んでしまうということ。だからセイラはただ逃げることしか許されない。そしてもう一つは、影は祓詞ほりじを唱えた者がいなくななる限り、一定の期間が過ぎると浄化されてしまうということだ。つまり、祓詞を唱えた者を狙つてくるということになる。（つまり、次は狙いがセイラから俺になるってことだよな。大丈夫かよ。）

そんなことを思いつつも、周囲を警戒しながら古びた神社へと足を運んだ。

ふと頭の中で不安がよぎった。（トカゲがあんなにでかくなると思つても見なかつたぞ。犬くらいの大きさか…。噛まれたら痛いじやすまなそうだな。セイラは大丈夫なのか。）

ミコトは、鼻血を押さえながら走ることが、こんなにもしんどいものだと初めて痛感していた。（漫画の主人公のようにはいけないか…。）

神社には人影が無く、少し奥の林にはセイラがいた。

セイラの様子が普段とは少し違うことにすぐに気がついた。目は緑色に輝き、体から緑色のオーラが出ている。そばにいるはずのリリイも見当たらない。そして、おそらくあれがトカゲの影であろうものが見えた。おそらくといったのは、ミコトが見た影くらいの大きさの木のつるの塊かたまりが、セイラの前でわずかばかり動いているのだ。右手を前に突き出したセイラは、まるで木のつるを操つているようだ。

「オン ロロロロ マカリシェイ ソワカ。汝よ 我に力を与えたまえ。」

次の瞬間、虚無羅を捕らえていたつるが蛇が獲物を捕獲するとき

のよつにきつくしまりだした。

「わゆえええ」というような爬虫類が叫んだらじのよつな音を出すのではないかといふ断末魔に似たよつな声が林中に響き渡つた。顔を歪めているセイラの左手が震えながら握りしめられた。それと同時に木のつるはもうこれ以上しまらないといつたといふまでしまり、同じくはじける音と共にしなだれて地面に落ちた。

救いであつたのはその後に飛び散つたのが血や内臓といった類ではなく、黒い色をした液体だつたということだ。

その場で生睡を飲んでたたずむ//コト。その黒い液体も、だんだんと色がかされ、薄くなり、じぱりくして見えなくなつてしまつた。
「…見てた、の？」
「ああ。・・・ちょっと話が違つね。」
「…ええ。「」めんなさい。こんなに狂暴だとは思わなかつたの。」
「そう…か。」

第18話 ～セイラの力～（後書き）

セイラの仕事だけで終わりました。

植物を操るという力がセイラにはあります。

戦う場所が限られてしまうのが難点です。

次はミコトが力に目覚めます。ベタベタな展開ですみません。
よろしかつたら感想をお願いします。こんな風にストーリーが進む
といいなどい意見などもお待ちしております。

筆者「一ナ

「ゆうゆうはくしょ」の4人の中で誰が好きかといわれれば、やはりクラマですね。

好きなキャラは強くあってほし」と思つのは筆者だけでしょうか？

第19話 ～戦いの後～

緊張していた肩の力が少し抜けたことは裏腹に、衝撃的な映像をみたマリトは自分を落ち着かせようと頭の中を整理することになった。

「今、さつきのトカゲだよな？」

「ええ。そうよ。」

「あれが、浄化？」

「ええ。そうね。」

「…ああ。そうか、やつたな。とにかく、浄化でき。」

自分の口からでた言葉とは別に、何か心から喜べないものをマリトは感じていた。

「…本当は、虚無羅^{きよら}の浄化の仕方として、もう一つ方法があったの。虚無羅の核を壊すこと。」

「…そうか。まあ、そんなところだとは、思つたよ。」

「さつきの、…力を緩めたりしたら、さつきと虚無羅はマリトを襲つてたと思つ。」

「ああ。そうか。」

「…『めんなさい。』

「…いや、あやまるなよ。…漫画とかじや、よくある話だ。（たしかに、一瞬、虚無羅に同情した。でも、もしかしたら、あいつに食われていたのは、自分かもしれないんだ…。）

「お礼をいわなきやな。ありがとう。」

「…いいえ。そんなことないわ。私も、あまり好きじやないの。」

「だよな。…おれ、じいちゃんに言わたることがあるんだ。『今の人間は、この牛や豚や鶏がどうやって食卓に運ばれているか知りやあせん。牛や豚だって泣きながら殺される。この命は、人間に食べられるために生まれてきたんじゃない。人間はおごっちゃいかん。命をもらつちよるということを知らにやいかんじばい』って。さつき

と、それと似たような感じだよな。」

「…？ そうね。」

セイラはなんとなく分かつたような分からないような曖昧な返事を返した。

（うーん、例えが悪かつたか。）

「あのや、やつしきのが、セイラの力ってやつ？」

「ええ。 そうよ。」

「すゞいんだな。木を操れるんだ。」

「ええ。 ここには、ちょうどいい木がたくさんあるから。」

「それって、やっぱり自分のカラーに関係するの？」

「そうみたいね。私の場合は、森だから、じついう力が使えるみたい。」

セイラの体が緑色の光に包まれ、リリイが出てきた。

「やあ。」

気軽に話しかけるミコト。

「こんにちば。 リリイです。」

「こんにちば…。」

「私から、少し説明いたしますね。」

第19話 ～戦いの後～（後書き）

人はきっと何かに守られて生きているはず。
夜、眠りに着く前、一日の出来事を思い出し、
それに感謝の詞を思い浮かべてみてください。

きっと体は温かいものに包まれ、
守り神の存在が感じられるはずです。

～なーんて後書きもたまにはいいじゃないですか～

筆者コーナー

「スマートボーイ」というアニメ映画を見ましたが、映像がきれい
で良かったです。

話の構成も案外しつかりとしていて好きでした。ロボットとかメカ
を作れる人にはこがれますね。

第20話 ハーパーの力(一)~

「私はセイラさんと同化することによって、私の力が少しですが使えるようになるのです。」

リリイがセイラの使っていた力についての説明をしてくれている。「そつか。じゃあ、自分はポンポンと同化すれば何らかの力が使えるんだね。」

「そういうことですね。」

「…知らなかつたポン。(ウヒーン)」

「…大丈夫だから、そんなに落ち込むなつて。」

「大丈夫よ。」

「ウウ…最近こればっかりポン。」

「そうだ。ポンポンはどんなことができるの?」

「ポンポンは…飛んだり、はねたり。」

「すげー。飛べるの?」

「さつそく、試してみたら?」

(やっぱ、さつそくをさせしてきた。)

「ポンポン。頼むぞ。」

「OKポン。」

ポンポンは静かにハーパーの中に入つていつた。ハーパーの体が空色に輝く。

「これでいいのか?なんか、あんまり飛べるつて実感はわかなければど。」

「ええ。そのままだと無理よ。」

「どうして?」

「契約の詞を唱えるの。」

「呪文多いね。」

「そうですね。」

リリイが登場して言った。

「きっと、あなた方の場合は、‘オン ロロロロ ブラフマー ソワカ’と唱えるのではないでしょうか。」

「えっ。そうなの？わたしの場合、‘オン ロロロロ マカリシヒイ ソワカ’よ。不思議ね。」

「それでもないですか。力の源がどこに属しているか。お願いの先が違うとこだけですね。」

「さすが、物知りだね。」

「じゃあ、いくよ。‘オン ロロロロ ブラフマー ソワカ’ミコトの体が青色に強く輝き、その瞳は一層強い青い光を放つのだつた。

「すごい。力が漲つてくるようだ。」

「氣をつけてね。あまり長い状態でいると一人とも疲れてしまつわ。」

「わかった。風を感じる。ちょっと、飛んでみる。」

不思議に、ミコトには飛べる感じがしていた。足に今まで感じたことの無いような力を感じるのと、浮いたように軽い体。また、風の気持ちが分かるように心にしみこんでくるのだ。

「エイツ

軽く地面を蹴ってみる。それだけでも3メートルほど浮いたどうか。神社の屋根瓦を見下ろした。（すばー。めっちゃ感動してる。）体が震えてる。ポンポン、すごいぞ。きっと用歩いていたらこんな感じになるのかな。）静かに体が重力を感じ下降していった。

「よかったです。すごい似合つてますよ。」

リリイが笑顔で囁いた。

「ありがとう。なんかすげー嬉しいよ。」

「よかつたわね。私も、うらやましいわ。」

「そんな。セイラやリリイのもすげーつて。」

「ええ。私も、この力、大好きよ。」

「そつか、きっと、自分とずっと一緒にいたから、しつくつくるん

だよな。」

「そうかもしれないわね。…ええ、きっとそうだわね。」

心に満ち溢れている充足感を感じていたが、一抹の不安を覚えた。

「でも、どうやってこれで戦えばいいんだろう?」

第20話 ～ミリタリの力（一）～（後書き）

嫌なことがあつたとき

そんな時にでも

寝る前に

少しでもあつたといい」とこ

感謝できる人ほど

心の強い人はいない。

信じてほしい。

あなたを守つている者がいることを・・・

（再びこんな感じの後書きです。）

筆者コナー

ガンダムシリーズで何が好きですか?と言われたら、おそらく「WEING」と答えます。

第一話のヒイロの台詞。「お前を殺す」と、その後に流れる音楽に心を奪われたの覚えています。

第21話 ～//ΠΤの力（2）～

「//ΠΤの体が一瞬身にまとつ光を強めた。

「風を集めてみたらどうかなポン」

「ポンポン、いるのか。」

「うん。どうやらポンの意識もちゃんとあるみたいだポン。右手に意識を集中してみるポン。」

「〇×。風を集めるんだよな。こうか？」

「つかもうとしてもだめポン。」

「何やつてるの？」

不思議な動きをする//ΠΤにセイラがつづけた。

「ああ、頭の中でポンポンと会話してる。」

「なんだ。よかつた。」

右手にもう一度意識を集中させた//ΠΤ。次第に風が集まつてくる感覚を覚えた。（右手が温かい。風のもつエネルギーを感じる。）それは手の平の上で回転を始めた。

「す、いい。私の手にもしつかりと見えるわ。」

「ぶ、大の風の塊はすでに砂や埃をまとい、普通の肉眼でも確認できるような状態になっていた。

「先ほどの詞をもう一回唱えると、力がぐうんとあがりますわ。」

「ミコト。その詞を唱えながら的にめがけてぶつけてみるポン。」

「よーし。」オン　ロロロロ…・ブラフマン　ソワカー、「

//ΠΤの体はまばゆい輝きを放ち、風の塊を5回ほど先のために投げつけるミコト。風の塊はまるで荒れ狂う龍のように、的としていた木にめがけて飛んでいった。

バキバキバキッという音と共に、相撲取りの周囲くらいにあるような巨木に、同じくその横周りくらいの穴が開いた。

「うわああ」

思わず激痛にその場に倒れる//ΠΤ。はじき出されたように出た

ポンポン。運の悪いことにあやつるマリナーの方に向へ先ほゞ穴を開けた巨木が倒れこんできた。

(か…体が動かない…。やばいっ。)

「 オン ロロロロ マカリシエイ ソワカ、」
倒れてくる木があと少しどの顔にぶつかってしまつといつ

瞬間に、木が二つに割れ、ミコトを裂けるように倒れた。」

ドシンと倒れた木の上にはセイラが座っていた。

「もう、はらはらさせて。それに、木をむやみに倒したりやだめよ。」

「ああ。じめん。」

先ほどとまつっていた鼻血が、ちょうど木が鼻に当たっていたのか、再びスースと流れ出てきた。

木は何かに命を取られたかのよつともとの木の状態へとむどつていった。

第21話 ～ミリトの力（2）～（後書き）

ミリトの力、いいですよね。

別に「なる」の、らせんが、のパクリとか言わないでくださいね。

別に忍者じゃないので勘弁してください。どうしても、自然の力をベースにすると発想が似てしまうんですよ。

後、関係ないのですが、日本は自然の豊かな国なのか、アニメizuや神性が高いよなあとふと感じます。

筆者コナー

ガンダムシリーズで、今連載中のアスナが主役の「ガンダム時代」のウェーボとティターンズの構想を描いた漫画も好きです。アスナがだんだんたくましくなつていきますが、お惚け天然キャラの方が筆者の好みでした。

第22話 ～戦いの後のひと時～

虚無羅きよむらとの戦いを終え、ミコトの、力、を確認した後、一人は学校へともどることにした。

「鼻血ばくせきだいじょうぶ?」

「ああ。今日は色々とありがとつ…。初めてづくしだったから。でも、なんか、これで自分も本当に虚無羅と対峙出来るかなって、ようやく少し自信がわいてきたよ。」

「ウフッ。無理しないようにね。」

いつまでも戻りたくないという感情がミコトにはあった。もしかしたら、山神セイラにもそういう気持ちがあつたのかもしれない。
神城高校は丘の上の少し高い場所に位置している。神社を離れ高校へともどる一人は、灯りのともり始めた町並みを見下ろすことのできる、神高生の自慢の一つである絶景。ポイントを歩いていた。（彼女いない暦16年間の俺だけ、これは…なんてラッキーなシチュエーションなんだ。）

神崎ミコトはあまりにも神秘的でロマンチックな情景と、先ほど興奮も合わせつて、今までに無い高揚感を覚えていた。

「セイラ…」

何も考えずに出てた言葉だった。ただ、この時間、少しでもセイラと話してみたいといつ思ひがあつたのだろうか。

「えつ、何?」

曇りの無い瞳でミコトを見つめるセイラ。それをじっと見つめるミコト。

「ブッ。」

いきなり笑い出したセイラ。

「『J...ごめんなさい。』ミコトが、その顔であんまり真剣に見るから

…。」

「その顔?…あつ。」

「コトは自分の鼻にティッシュがくるめて入れてある」とを思い出し、さらに顔を真っ赤にさせた。（やばつ、かつこわる。）ふとセイラの方を覗く。今まで見たことの無いような笑い顔を見せてくる。

「よかつた。セイラって、笑うとすげーかわいいね。」

自分でもそんなことをすらつと言つてしまつことが不思議でしょうがなかつた。いや、男が10人いれば、10人ともそういつたであらう台詞かもしれない。

「えつ。」

不意をつかれたセイラも顔を赤く染めて俯いた。^{うつむ}

第22話 ～戦いの後のひと時～（後書き）

「いつこいつ話もありかなと思い、作ってみました。
ミコトとセイラの関係はどうなるんでしょうか？」

筆者にも分かりません。ちなみに、二人とも奥手といつ設定です。
いつまでたっても進展せず腹立たしくなつても、どうでもいい愛嬌を。

筆者コナー

奥手といえば森里恵一ですね。でも、それがいいと個人的には思つ
ています。

ちなみに、「ああっ女神様」の話です。

第23話 タイミングの戦い

「きやあ。」

学校へ着いた二人が真っ先に聞いたものは、女子生徒の悲鳴であった。もうすでにほとんどの生徒がそれぞれの家へ帰っている時間だ。こんな時間までいるのは生徒会の実行委員か、よほど部活の好きな連中か、もしくは学校の隅でたむろしている不良たちだ。

「どうしたんだ。」

女子生徒は一人。肩を並べておびえながら走っていく。その先には一人の男子生徒がいる。暗闇でよく見えなかつたが、明らかに異変を観てとることができた。その一人は黒い影で覆われている。

「やばいわね。」

セイラの顔つきが変わる。

「どういうこと?」

「虚無羅^{きよむら}が人の心を支配しているの。」

確かに一人はまるであぶない薬の中毒者のようになだれをたらし、目がどこを向いているか分からぬ状態だ。先ほどの女子生徒はきっとこの二人の姿を見て悲鳴をあげたに違いない。虚無羅に心と体を奪われた生徒は、こちらの存在に気がついた様子だ。初めはゆっくりと体を動かし、その後に走る姿勢となりセイラとミコトをめがけてくる。

「とにかく、テニスコートのあるところまで逃げましょ。う。」

「OK」

体の痛みはまだ取れていらない。しかし走れるくらいにはなっていだ。グラウンドを通り越し、さらにサッカー場を過ぎたところにテニスコートがあった。学校でも一番人目につきにくい場所だ。この時間なら誰もいない。

逃げている間にもセイラはリリィと、ミコトはポンポンと同化をしていた。

「オン ハロハロ マカリショイ ソワカ。」「オン ハロハロ
ブラフマー ソワカ。」

ミコトとセイラは追つてきた不良生徒一人と退治した。

「で、どうすればいい?」

「さつあと回じようこするしかないわ。体に触れて祓詞を唱えるの。

「わかった。」

ミコトの動きはポンポンと同化したことで数倍早くなっていた。
(体が風のようだ。)

地面を蹴りながらあつとう間に不良の一方にふれる。髪が長く茶色に染め上げ、右の耳にはピアスをつけている方だ。その横にはニットボウを深くかぶり金のネックレスしているやつがいる。ただし二人とも本人の意識は無いことが良く分かる。よだれをたらし、まるで薬中の男のようだった。

(何だこれは。)

ピアスの男に触ったミコトは一瞬で違和感を覚えた。皮膚が妙に硬い。次の瞬間、左腕に鋭い痛みを覚えた。まるで鋭いつめで引っかれたような傷跡が一本、その腕には付けられていた。

「くうひ…。」

痛みをこらえ、ニット帽の男の腹に少し強めにけりを入れた。ニット帽の男は5秒ほど先に倒れこむ。そのとき、コートを囲むように植えられているイチヨウの木がゆっくりと伸び、ニット帽の男の足と手を絡めた。その隙にセイラはニット帽の男にふれ、祓詞を唱えた。

「もうものまが」と、つみ、けがれあらば はらえたまい きよめたまへと もつすことを きこしめせと かしこみかしこみもつす。」

ミコトも握っている手を離さず、ピアスの男のあごに掌底を食らわせ、そのまま相手を倒し、腕の関節を決め相手が起き上がれないようにしていはざだった。

しかし、ボキッと鈍い音を響かせピアスの男は自分の腕を省みず体を捩じらせてきた。腕を折った感覚に罪悪感を覚えたため、ミコトの反応が若干遅れてしまった。

ピアスの男は折れていらない腕でミコトの横つ腹を殴る。ドフッという鈍い音と共に、ミコトはその場に嘔吐した。

（なろう。）ミコトはその場を蹴つて今度は10㍍ほど高い位置まで跳んだ。相手はじつやう飛べないようだ。しかし、じばらくすれば地上へ戻つてしまつ。ミコトは風の力をその右手に宿した。

「気をつけて。」

すかさず状況に気付いたセイラが声をかけた。

「大丈夫。手加減する。」

そう。手加減をしなければならない。相手は生身の人間なのだから。ただ、非常に硬いその体から、生身というだけでは表せない何かを感じていた。

第23話 ～夕刻の戦い～（後書き）

ミコトが跳べるって便利ですね。

風は攻撃専用の力なので、ちょっと強めの設定です。

そのうち飛べる虚無羅も登場予定です。

戦いもいよいよ佳境です。続きも是非見てください。

筆者コナー

むかし「マインドアサシン」という漫画がありましたが、知っていますか？

かずはじめ氏の作品です。主人公がクールでかっこよくて、ちょっと医者にもあこがれました。いまでも何かの作品を手がけていると 思います。

第24話 ハトカゲ虚無羅との戦い

〃ハトの右手に風の塊ができた。

〃ハトは不思議に空気を蹴るという仕草を学び取っていた。空気の壁を右足で蹴つて自分が落ちていく方向へ力を加えた。ミコトに向かう先は、ピアスをついている男だ。その男もミコトを迎え撃とうとしている。ピアスの男の捕まえに来た右腕をはらいのけ、ミコトは男の胸に風の塊をぶつけた。男はその場で2回転ほどしてテニスコードの中央付近へと飛ばされた。そこへ急いで駆けつけ、今度は両腕を取りうつぶせにした。

〃ハトの腹の辺りに激痛が走る。うまく言葉が出ない。

「 ものもの… ま、がごと、つみ、けがれあらば…。はらえたまいきよめたまへと もうすことを キレしめせと… かしこみ… かしこみ もうす。」

（やつと、言えたぜ。くわつ、あばら骨おれてねえか。）

次の瞬間、一ノツトの男とピアスの男からは、先ほどの不良と回じような3つ目のトカゲの虚無羅きよむらがてきた。

明らかにこちらを向いて狙っている。（くわつ、まだ終わりじゃないのかよ。どう考へても、あのトカゲを押さえつけて、祓詞を3回唱えるつていうのはきついよな。）

次の瞬間、2体のトカゲはお互いが呼び合つかのように体を合体させ始めた。一瞬の出来事にセイラもミコトも啞然としてしまった。

「 しました。」

何がしまったのか、確信を持てない一人であったが、その予想は不運にも的中していた。格段にその禍々しさは強くなつていて、おそらく、2体にかけた祓詞の力はなくなつてないのだらう。この力が働けば、術者（この場合ミコトとセイラ）が倒れない限り、この虚無羅に残された命は、長くとも10日程度なのだから。しかし、10日というのは、飛行機に乗つて海外まで行かなければ不安に感

じる長さだ。

トカゲは人と同じほどの大さになり、先ほどまで4つ足で立っていたものがいつの間にか2本足で立っている。口を大きく開け、鋭い歯でこちらを見ると、キュアアアと耳を劈くような大きな声で威嚇をしてきた。手にも鋭い爪が伸びている。

ミコトの後ろからセイラの力であやつられた銀杏の木のつるが、虚無羅をめがけて鋭く伸びていった。その木のつるを鋭いつめで難なく切り落とす虚無羅。しかし虚無羅の足にもう一本のつるが絡みついた。しかしそのつるも尻尾で叩き落とし、鋭い歯で噛み砕いてしまった。セイラを視界に止めたトカゲ虚無羅は、その方向へと4つ足で這つていった。トカゲが人の大きさで這うというのが、どんなに速いかこのときセイラといコトは直々と思い知らされるのであつた。

セイラが不意にとられていると、大きな口がすぐそこまで迫っていた。その口はすばやくセイラの腹に噛み付いた。

「セイラー！」

バリボリと噛み碎く音が聞こえる。あまりにも悲惨な情景を、一瞬目を背けてしまつたミコトはその脳裏に描くのだった。

「うわああ。」

叫ぶと同時に勢いよくトカゲ虚無羅に飛び込むミコト。その手にはすでに風の塊が作られていた。

「オン ゴロゴロ ブラフマー ソワカー！」

ミコトの叫びと共に、神社で放つた2倍ほどあるかと思われる風の龍が虚無羅の体を咥え、天高く舞い上がった。

「ぐわあああ。」

あまりの激痛にミコトの意識はそこで途切れてしまった。

第24話 ハトカゲ虚無羅との戦い（後編）

セ、セイラー！！

トカゲ虚無羅との戦いが一気に蹴りがついてしまいました。
まあ、いいです。

セイラも・・・

次回をお楽しみに。

筆者コーナー

野球漫画つてはずれが少ないですよね。満喫に行ってなんかないかなと手にする野球漫画は、どれもたいてい読むことができます。この前は「ラストイニング」を読みました。

す「」くいってわけではないけど、悪くありません。

野球漫画では、最近でてきた「巨人の星」（マガジン）が面白いと思っています。

第25話 ～決着の後～（前書き）

前話はセイラの安否が気にかかったと思します。
さあ、どうなつていいのでしょうか。
では、25話、どうぞ。

第25話 ～決着の後～

「こりだ、ここは？」

「バリボリバリボリ

ひどく鈍く嫌な音が聞こえる。

「やめろー。」

どうあがいても、起きることのできない自分の体から、涙が溢れ出してくるのが分かった。

倒れた自分の横では、トカゲに食べられてしまつセイラの姿が無残に横たわっていた。

「うわあああああああ……。」

はつと目を開き、悪夢から覚めたミコトは体中から汗がにじみ出でていた。

「う……」

体中が痛い。

「大丈夫？」

その一言によって目を覚ました少年は自分の目を疑つた。

「セイ……ラ？」

「ええ。 そうよ。」

「つつ、ここは？」

周りを見ると木に囲まれていて何一つ分からない。分かることといえば、この柔らかな感触だけだ。そう、夢か現かセイラに膝枕をされているのだ。

(天国か・・・)

真剣にそう思つ//コトであった。(天国でもいいから、もう少しこの状態でいたい。)

不思議と涙が頬を伝つてセイラの腿ももにたれた。あまりの緊張と悪夢から、こきなり天国にいるような感覚に陥つたのだ。無理は無いだろう。

(あーあ、泣いちゃつてるよ。現実だとしても、かつこわるくてセイラを見れないな。あと、ちょっと、ここを動きたくないし……。)あまりの疲れから、そのまま深い眠りに落ちる//コトであった。

それからどれほど時間がたつたであろうか。いや、それほど時間はたつていなかもしれない。

「…ト。//コト。」

まつと田を覚ます//コト。

「ノリコは?..」

先ほどと同じ、木に囲まれた空間だが、その木々が次第に背を低め、空にはまるい月がくっきりと見えるようになった。

(テニスコート?)

かわいそうに、先ほど倒れていた二人はまだこの場所に倒れてい
る。

「セイラ?..」

「ええ。」

「本当にセイラなのか?」

「ええ。」

「よかつた。」

体を起こした//コトは思わずセイラを抱き締めた。満月に照らさ

第25話 ～決着の後～（後書き）

セイラは、食べられてませんでした。

大方、予想されていたと思いますが・・・。

変な気苦労をさせてしまつてしまつて、申しぐざいません。（そんな熱心な読者様がいれば嬉しい限りですが。）

戦いがひと段落着きましたが、虚無羅との戦いは始まつたばかりです。

ただ、個人的には戦いばかりにならぬよう配慮したいと思います。

次はセイラの母親の登場です。

筆者コナー

「最終兵器彼女」って漫画、知つてますか？実写版にもなつたようですね。

なかなか面白い展開です。北海道が舞台のSF戦争物ですか？漫画家で戦車とか戦争の兵器のことについて詳しい方が多いですよね。なんでしょう？

第26話 ～帰宅～

（セイラも無事だったし、俺の傷もある後セイラが癒してくれた。もちろん、まだ2本の傷跡は残っている。でも、ここまで治れば十分だ。）

「森には癒しの力もあるの。少しなら体の疲れが取れたり、傷が回復したりするわ。」

「セイラの力って本当にすごいな。」

「ウフッ。ありがと。ミコトに言われると、素直に嬉しく感じるわ。」

セイラの一言に胸の鼓動が早くなるミコト。田のやり場に困ったミコトは腕時計を見る。

「あつもつこんな時間だ。」

時計の針はすでに10時を回っていた。

「やばい。」

「ううう…」

先ほどまで倒れていた一人が目を覚ました。

「もう、こきましよう。見つかると面倒なことになるわ。大丈夫。あの一人の傷も、私が治しておいたわ。折れた骨の方は、まだ痛みはあると思うけど…。」

「そつか、かわいそうなことをしちゃったな。」

そう言つて二人は自転車置き場へともどつた。

「正門が閉まつてる…。」

「まったく。・・・警備員はいないよな？」

どうやら警備員はいないらしい。二人は先ほどまとは違つた緊張感をもぢながら、すでに暗くなつた夜道を歩き出した。ミコトは

自転車を引きながら、セイラの隣を歩く。夜10時。裏門から家に向かう一人だが、セイラの家は門を出て逆向きにあるらしい。なんと歩いて10分のところにあるという。

「そんなに近かつたんだ。親、心配してるだろ。」

「大丈夫よ。…いえ、きっと心配してるわ。久しぶりに遅くなつてしまふものね。でも、私は母親には理解してもらつているの。弟には言つていなけれど。」

「お父さんには？」

「父親は弟が生まれてすぐに死んでしまつたわ。」

「そりなんだ。ごめん。」

「いいの。仕方のないことだから。」

「そつか。親の理解か・・・やっぱり、親に分かつてもらわないと無理かな。」

「あれば楽よ。それに、親についている守り神たちも、きっとよいように理解してくれると思うわ。」

「そつか。誰にでも守り神つているんだもんな。」

「そりよ。自分からそれを感じようとしない限り…。」

会話を続ける二人を丸い月が照らす。初夏の風が10時だというのにその寒さを感じさせない。電灯の明かりを頼りに、坂を5分ほど下り、角を3回ほど曲がつてセイラの家についた。

「ただいま。」

「お帰り、セイラ、今日はずいぶん遅かったわね。」

セイラを見つめる母親。

「心配したわ。傷を作つてるんじゃないかつて。」

セイラを抱きしめた。

「大丈夫よ。…紹介したい人がいるの。」

「えつ」

セイラの母親はあっけにとられた表情でセイラを見つめ返した。

「失礼します。」

(気まずいなあ。本当はそのまま帰りたかったんだけど……。「できるだけ隠し事はしたくないの」って言われちゃつたしなあ。)

「まさか、…彼氏かい？」

「そういわれて顔を赤らめるセイラ。

「…いやね。ママ。そんなんじやないわ。」

(だよなあ。ハア…。) 少し落胆の表情を見せぬ//ト。

「彼も人の虚無きよむが見えるの。」

「神崎ミコトです。セイラさんとは、今朝知り合いました。」

(そうか。知り合ったのは今朝なんだ。なんだかずいぶん前に会つ

た気がしてた。はは・・・疲れてるのかな?俺。)

「そうかい。なかなか明るそうでいい子じやない。」

横目でセイラを見る母親。

「だから、彼氏じやないわよ。」

「分かつてますよ。」

第26話 ～帰郷～（後書き）

いやー、戦いの描写って難しいですね。
ここにじょと一息です。

のほん系の話、嫌いじゃないといふことに気付きました。今度は恋愛小説に挑戦か？ありえない。という感じの筆者です。セイラとミコトの関係はどうなつていくのでしょうか？感想をもらえるつて、すごく嬉しいですね。

作者の励みになりますのでお願いします。

つてか、感想がないとやつぱり続ける気が沸かなくなつてしまつのも事実です。

みんな見てくれてるには見てくれてるんだよなーと、常にアクセスカウンターとにらめつこ状態です。

筆者「ローナ」

今回のお勧めは、・・・パツと思い浮かばなくなつてきました。そうそう、YOSHINOのローリングスターいいですよね。某アニメのソングになつていたところとは知らなかつたのですが、ノリノリの曲が好きみたいです。

第27話 ～長かった一日の終わり～

セイラを家へ送り届け、セイラの母親にまでおこづかをしたミコト。いやな気持ちはしていなかつた。時計はすでに夜の11時を回つてゐる。（こんな遅くに帰つてきたことなんてないぞ・・・。）ドアノブに手を掛け、少しの間硬直するミコト。その時、玄関の明かりが付き、ドアが押し開けられた。正面にはミコトの母親と妹が目を見開いて立つてゐる。

「よかつたー。お兄ちゃん。生きてるじゃない。心配したんだから。

「・・・ああ、ごめん。」

「わけは後で聞くわ。まずは中に入りなさい。」

運のよこことに今日は金曜日だ。明日、明後日と早起きをしなくてすむ。（まず初めにシャワーを浴びよう。）家に帰つて緊張の糸が取れたのだろう、体中にたまつた疲労が出てきた。ソファにでも座つたら1分と持たず寝てしまつていただろう。

シャワーの蛇口をひねる。熱い湯が左腕の2本の傷にしみる。血痕のついた白い制服はバッグに入れ、Tシャツ姿で帰つてきていた。おそらく母親も違和感を覚えたのだろう。ミコトがシャワーから出でぐるのをじつとテレビのある部屋で待つてゐる。

「チサ、もう寝なさい。」

「うん。そうする。本当は、チサもどうしてお兄ちゃんがこんなに遅くなつたか知りたいけど・・・。」

「そうね。きっと明日教えてくれると思つわ。」

「お兄ちゃん、ついに彼女ができるのかなあ？」

「どうかしら？…何かちょっと違う雰囲気だったわ。」

そんな会話をされているとは知らないミコトは、ぱつの悪そうな顔をして居間に入ってきた。

「ええっと…。今日は、まず、遅くなつてごめん。」

「なぜこんなに遅くなつたの？」

ミコトはウソをつく癖くせがあつた。いや、癖と言つよりも反射的に口から出てしまつのだ。相手に本当のこととを知られたくない。きっと知つてしまつと迷惑がかかるとこつ思いが浮かぶのだろう。

「この前友達に貸した参考書、今日どうしても返してほしかつたら、電車でそいつん家に行つて……」

（違う。本当のことを話さないと……。言つて決めてたろ。）ふと頭にセイラとの会話がよみがえつた。（「きっと家族の守り神もいよいよ導いてくれるわ。」…そうだ。言つてみよう。）

「いや、違うんだ。本当は、…言つても、信じられないかもしだなあ……。」「

ミコトは母親と妹に、昨日おきた出来事と、今日あつた出来事を伝えた。初めは一人とも半信半疑であつた。しかし、彼女たちの疑惑を一瞬にして晴らしたのは、やはりポンポンとの同化だった。庭に出て周囲に人気がないことを確認したミコトは、屋根の高さまで飛んで見せた。妹は無邪氣に羨望せんぼうの眼差しで見ている。「お兄ちゃんすごーい。いつでもできるの？わたしにもそういうことができるといいな~。不思議…お兄ちゃんがそんなことができるなんて。」

「自分で信じられないさ。今でも夢かと思う。」

ミコトの目には神に祈つているような母親の姿が目に入った。

「…ミコト。あなたがそんなに立派な使命を与えられたのは、私も嬉しく感じるわ。…でも、今日の傷。虚無きむというのにつけられた傷なのでしょ~?~」

「…ああ。」

「これだけは誓つて。…絶対に無理しないでね。」

「…分かつてる。」

「それと、私たちに、どれだけ迷惑がかかつてもいいから、協力できることがあれば言になさい。」

「…ありがとう。」

ミコトは家族に今までのじきさつを話したことを本当によかったです
と思っていた。ふと一人を見ると、何か光のようなものが一人の体
を覆い、点滅しているように見える。

(そうか、あれが二人の守り神なんだ。)

「ただいま。」

玄関のベルが鳴る。ミコトの父が帰ってきた。

「お帰りなさい。」

「お帰り。」

「おっ、めずらしい、3人そろってこんな時間まで起きてるのか。」

「ええ。今日はちょっと事情があつてね。あなた、少し大事な話があるの。ミコト、チサ、もう疲れたと思うからもう寝なさい。」

時計は夜の1時を回っていた。

(ふー、長い一日だった。でも、いい日だったよな…。母さん、チサ、ポンポン、サンキュー。)

ミコトは布団に入り、目を閉じた。布団に入るとポンポンにぐら
れでいるという温かさを感じながら、10秒で眠りについた。

第27話 ～長かった一日の終わり～（後書き）

ここまで読んで下さり、本当にありがとうございました。次回からは、サトミ（覚えてますか？）の自殺を引き起こした張本人が出てきます。

何でも虚無羅のせいにすればいいといつものでもありませんが、人の影の部分は、本人以外の何かの力が働いていたという考え方もありかなと思います。

とにかく、ここまで読んでくださってありがとうございます。一応、作者の中では、一区切りついたという感じです。よかつたよかったです。

筆者コナー

お勧め曲

バンプオブチキン「ハンマーソングと痛みの塔」なんてどうですか？

どんどん強くもつと強くという歌詞が忘れられません。

『//アト…お主は何のため元の世界に生を抜けたのじゃ？』

「誰だ？」

『誰でもよいことじや。なぜお主はこの世界に生を受けたのじゃ？』
「そ…そりゃ親父とお袋が出会つて…」

『違う違う、最初に言つたわうが、『なんのために』じや、『何をするために生まれてきたのじや』と聞こよけのじや。』

「聞こちよつて、じいちゃんか？」

『ええいっ、質問に答えいつー。』

『分かつたよ。…なんでだる？そんなこと言われても分かんないよ。あつ、そつそつ。当分は虚無羅退治ひつのがあるかな。この前も危なくやられるとひだつたし。…』

『そつか。では、神の望みは何じやと思ひへ。』

『神？人間を作つたといつあれか？神様のことだよな？』

『そうじや。神様じや。』

『神様か。ポンポンがいるから、神様もいるんだよな。つてか、ポンポンも神様なのか？』

『まあ、人の言つといふの守り神じやな。守護靈とか、精靈とか言われちよる。』

『どうか。神様の望むこと？なんだろ？世界平和か？』

『なぜじや？』

『いや、適当に言つたんだナビ。』

『頭の弱い男じや。もつちよつと修行せー。』

『な…なんだよこきなりつ。』

『そんなことでは、これから勤めが危ぶまれるの。』

『これから勤め？やることがあるなら言つてくれよ。』

『もつ少し自分で考えることじやな。ふおつふおつふおつ。』

(・・・はつ、夢か。なんだつたんだ?まあ、夢だからいいか。)

聞話（後書き）

「いつも忘れる夢の中の話」というのが設定です。

人がどうして生きるかとか、なぜ生まれてきたのかって、難しいですね。それを考えていると眠くなるという特技が筆者にはあるようです。最近気がつきました。もしよかつたら、読者様方の考え方を下さい。

執筆の参考にしたいと思います。
ではではへへ

第28話　～新たな一日の始まり～（前書き）

本編第一章の始まりといったところです。
ミコトとポンポンのんびりとした会話です。
いろいろとつっこみどころはあると思いますが、
勘弁してくださいね。

第28話 ～新たな一日の始まり～

まるで昨日までの出来事がうそかのような清々（すがすが）しい朝の光によつてミコトは目を覚ました。不思議と、昨日の疲れは感じられなかつた。セイラに癒してもらつた効果が大きかつたといふこともあるが、家族に真実を話し、それが受け入れられたということが何よりもミコトの心を軽くした。

「ああー、いい朝だな。」

ミコトの隣にはポンポンが丸くなつて寝ていた。（こんなかわいいやつが、自分の守り神なんて、信じられないよな。）

耳をピクッと動かしたポンポン。人間と同じようにあぐびをしている。

「おはようポン。」

「ああ、おはよう。… なあ、ポンポンって自分の守り神なんだよなあ？」

「当たり前ポン。」

「前にも聞いたけど、何をしてくれてんの？」

「うーん、難しいポンな、…。まずは、ポンポンはミコトが幸せな人生を送れるように導いてあげることが仕事なんだな。仕事というか、趣味というか、…。」

「へえ。つて、趣味かヨ…。守り神つてみんなについてるんだよな？」

「？」

「そうポン。生れた子には必ず守り神がついているはずポン。」

「… だったら、悪いことをするやつなんて、いなくなりそうなのにな…。」

「うーん、そこが難しいポン。守り神もがんばつてその人がいい人生を送れるように協力は惜しまないポン。ただ、やってあげられることは、実はほとんどないポン。さつきも言つたように無意識に語りかけたり、ある程度危険から遠ざける予知をしてあげたりするく

らいポン。人が『えられた命をどう生きていくかは、やっぱりその人の選択にかかっているポン。』

「なんだ。」

「そうポン。で、ポンたち守り神も、その人たちのあつたかい想いがないと、どうしてもその人に憑いていられる元気がなくなつてしまふポン。』

「そつか、それで守り神が憑いていない人がいるんだな？」

「そうポン。守り神の力の源は、‘ありがとう’や‘生きててよかつた’というその人の想いポン。そういう願いや想いがあれば、守り神も元氣でいられるから、本人もたいていいい気持ちで過ごせるポン。』

「そつか。：でもさ、人間って、うまくいってるときはいいけど、調子悪いときはなかなかそう思えないもんなんじやないか？」

「そこは、すごく大事なところポン。でも、実際はそうじやないポン。例えば、本人の魂を磨くためには、必ず苦しいことが必要になつてくるポン。そうしたときは、本人が辛い、苦しいって思えても、守り神も耐えることができるポン。でも、幸せを幸せと感じなかつたり、いつも満足しなかつたり、他人のせいばかりにしていたりすると、ポンたちはどうしようもなくなつて、先にポンたちが消えてしまうポン。』

「そつか、なんか、じいちゃんが言つてたことを思い出すよ。『いいか、ミコト、お前はありとあらゆるものに生かされているんじや。感謝の気持ちを忘れちゃいかんぞ』って。』

「そうそう。その気持ちがポンたちの元気のもとポン。』

「へえ。じゃあ、ポンは、きっと大丈夫だよ。オレは今、すげー感謝してるから。』

「へへへへへ。』

第28話 ～新たな一日の始まり～（後書き）

なんか、ポンポンと「コトとのノロケになつてしまひましたね。
次からは、少しシリアルになつていきます。

シンジとその虚無羅の話がメインになつていきます。

筆者コーナー

バンプオブチキンの「メーデー」

この、メーデーは労働者が春に行う春闘ではなく、
フランス語の救難信号という意味だと思います。

第29話 ～闇にとらわれたシンジ～

(もう、学校へ行けない……。)

「シンジ、開けなさい。どうしたの？」

「来ないでくれ……。」

「ねえ、どうしちゃったの。何がおきたっていうの？」

「母さんには関係ないだろ。もうかまわないでくれよ。」

(なんでこんなことになつた？サトミが自殺をしてからか？いや、俺があいつに告白してからか？関係ないやつまで偉そうに言いやがる。「あなたがサトミを振つたから、サトミは自殺したんでしょう。」だと、「冗談じやない。こつちは振られた上に、濡れ衣まで着せられたんじや、やつてられないぜ。クラスの奴らはきっと今頃俺のことを見て笑つてるんだろう。」)

「う……」

口元手を当てて急いでトイレへと駆け込むシンジ。

「うえええ。」

(気持ち悪い。胸が苦しい。誰か助けてくれ。)トイレの床にひざをつき、かがみこんだ状態で嘔吐を繰り返すシンジ。

「シンジ、大丈夫？学校には欠席の連絡を入れておいてあげるから。後でいいからどうして何も話してくれないのか聞かせてね。」

シンジの目の下には隈くぼができる、ここ2、3日で別人のような雰囲気を醸し出していた。

「シンジ、開けなさい。学校を欠席ましたんだから、理由くらい聞かせなさい。母さんだってパートがあるんだから。」

(くっ。こんなに苦しい思いをしてるのに、なんであんたの都合にあわせて俺が言わなきゃならないんだ。)

「つむさーつ。」

「シンジ、親に向かつてその言い方は無いでしょ。あなたそれでも

高校生なの？自分のことばかり、自分で説明できなきゃダメでしょ
う。もう行くからね。どうなっても知らないから。」

（「ふむむこな。…母親でさえ、自分の心配なんかしていいのか…。）

「静かに、してくれよ…。」

シンジの頬から涙があふれていた。

（チクシロー。なんでこんなに嫌なことばっかり考えるんだ。くそ
つ、くそつ。）握り締めたこぶしを思い切り壁にたたきつけた。ド
ンッといつ瞬に異常を感じたのか、シンジの母親は慌ててドアをせ
わしなくノックする。

「どうしたの？どうしたの？シンジ？シンジ？」

「うるさいこいつ。せやべパートに行けよ。」（本当にどうでもいい
セリフ。）

「これ以上私に心配を掛けないで。」

（…せり、結局は自分のことしか考えてないんだろう。）

シンジは元を出しの中にあつた果物ナイフおもむろにを取り出して、
机つぶ握りしめた。

第29話 ～闇ヒトリガれたシンジ～（後書き）

またまたシリアル場面です。

極端かもしだせませんが、苦しいときや、辛いときって、気持ち悪くなったり、

どうしちゃせりゃなく感じたりするときってありますよね。

筆者コーナー

ホーリーランドという漫画おすすめです。

まあ、けっこうバイオレンス系ですが。

主人公の悩みとか、強くなる姿とか、見ててスカッとするときもあり、なんたらかんたらです。

第30話 ～闇の所業～

ナイフを握り締めたシンジに、急に恐怖が襲つた。それは自分自身に対する恐怖だった。

(何を考えてるんだ。…これで母親を刺すつもりだったのか?)
しばらく体の震えが止まらない。

(死んだほうがいい?)

恐ろしい考えが頭をよぎつた。右手に握られたナイフ。そのナイフは持ち主と同じ左手首へとあてられた。刃が皮膚に触れる。

(俺が生きていたら何をするか分からぬ。)

ナイフにかける力を次第に強めていくシンジ。ついすらと赤い線がその左手首に引かれた。

(…だめだ、できない。)

その時、自ら命を絶とうとしていたシンジはあまりの恐怖にその場でまた嘔吐した。あふれ出す涙とともに、計り知れない虚無感がシンジを襲つた。

(どうすればいい?)

「シンジ、もう、わたしは行くからね。」

「ああ。大丈夫だから。」

必死に何も無かつたように装うシンジ。それを聞くと、シンジの母親はパートに出かけてしまった。おそらく4時までは帰つてこないだろう。初めて理由なく学校を欠席したシンジ。右手に握られていた刃は、知らず知らずのうちに、また左手首に掛けられた。

(「シンジ、自殺なんて、しないよなあ。」「あつたりまえだ。振られたのは一度や一度じゃないぜ。」)

ふとよみがえったミコトと交わした言葉。

(そうだ。こんな情けないことで自殺なんてできるか。)
気を張つてみたがやはり体を覆つている虚無感が取れない。

(くそつ、なんとしても今日一日生きてやる。)

それは死に対する本来のシンジの抵抗であった。生きるといつことがこれほど怖く、苦しく、気持ち悪いといつ感覺を、シンジは初めて知るのであった。

(生きてやる。生きてやる。)

シンジは襲つてくる死への恐怖に対し、ただもつそれしか考えられなくなっていた。

(しふといやつだ)

シンジには聞こえない声で、確かに何かが呟いた。

第30話 ～闇の所業～（後書き）

シンジはどうなつてしまつのか。

その想像は読者様におまかせします。

筆者コナー

バスケットやテニスも好きです。

バスケ漫画「スラムダンク」はもちろん、

最近だと「アヒルの空」（マガジン）がおもしろいですね。

＾＾

第31話 ～闇からきた者～

シンジにはもちろん見えていない。ただその姿かたちを目にしていたら、おそらくほとんどの人間がその場に腰を抜かしてしまったろう。サトミを自殺に追いやった虚無羅きよむらがシンジの肩に腕を伸ばしている。

頭には大きな2本の角があり、顔は牛のよう。赤く光る二つの目玉に人間のような体。その背中からはこうもりのような羽が伸びていた。

シンジは胸の苦しさを何かにぶつけられずにはいられなかつた。枕を投げつけ布団をけり、壁を殴りつけた。わけのわからない悔しさと虚しさで目からは涙があふれ出していた。

「お前が死ぬことでまた仲間が増える」

恐ろしく低い声でその悪魔のような虚無羅は囁く。

時計の針はすでに毎の3時を回っていた。シンジはまだ何も口にしていない。シンジはずつと死との戦いに向き合つていたのだ。しかし、それを理解できるものはいなかつた。
(ここにいてはまずい。)

ふと、母の帰りが頭をよぎつた。シンジは急いで家を飛び出した。(どこへいく? できるだけ人のいる所へ行こう。)

シンジはスクーターに乗り駅の方へと向かつた。その姿はあるで何かに追われているようだつた。交差点に差し掛かつたところで信号が赤になつた。信号機の赤いランプの色が先ほどの左手首に赤い血の傷跡を思い出させた。

ちょうど中学生のグループが横断歩道をわたつていて。笑いながら話をしているのが目に付いた。

（「あの人ガサトミに告白したからサトミさんは自殺したんだって」「えー、信じられない。あの顔で? よく告白なんてするよね。」

「ありえなーい。」「終わってるよね。」

(な…なんであんな中坊がそんなこと知ってるんだ?) シンジの額はいつの間にか汗が滴るほどにじんでいる。心臓の鼓動が早い。もちろんこれはシンジにしか聞こえない幻聴だ。しかし、シンジには幻聴を幻聴としてとらえるだけの気力は失せていた。
('そうそう。こいつ、自分の母親を刺そうとしたんだぜ。」「そんなやつが生きていってもいいのかよ。」「死んでくれたほうがよっぽどいいよな。') 行き交う人全てが自分のことを嘲笑つているかのようだ。(「どうして私を殺そうとしたの? あなたののような子は生まなければよかつたわ。」)

シンジの息遣いはどんどん荒くなり、喉がからからに渴いていた。頭の中は今にも貧血を起こすときのような、白と黒のモザイクのような映像がちらついている。耐え切れなくなつたシンジの精神は赤信号を無視してスクーターのアクセルを全開にしてしまつた。車の流れがとだえていないその交差点では、シンジのスクーターをよけようとした車同士が接触をし、それを避けようとする車のクラクションの音が響き渡つていた。からうじて出会いがしらの接触を避けたスクーターであつたが、後ろから追突された車がシンジのスクーターにぶつかり、シンジは反対車線の急ブレーキをかけた車のフロント部分まで弾き飛ばされてしまつた。

車から降りてきた青年が叫んだ。

「誰か、救急車、救急車を呼んでくれ。」

騒然となつたその場所には、15分ほどで救急車が駆けつけた。救急隊員が駆けつてもまだ、黒いヘルメットの内側の青年の目は、閉じたままであった。

第31話 ～闇からきた者～（後書き）

シンジは大丈夫なんでしょうか？自分で書いておいてよく言います
が・・・。シンジのキャラをもうちょっとほつきつさせたほうがいいとも思いますが、それは後々にします。

筆者コーナー

今、見てみたいのが、銀色の髪のアギトです。
自然が人を襲う未来・・・過去からやってきた少女。うーん、DV
D借りてこようかなあ？

第32話 ハシンドウを救え

ハシンドウが目覚めた土曜日の朝、不意に居間の電話がなった。（誰だろ、こんなに早くから。）朝食をとつてこたハシンドウは、受話器に手を掛けた。

「もしもし、神崎です。」

「こんにちは。小山ですが、ハシンドウさんはみえますか？」

「えつ、僕ですが、もしかしてシンジ君のお母さんですか？」

「ええ。いつもシンジがお世話になつてこます。」

「いいえ。どうしたんですか？」

「あの、昨日、シンジが…。」

電話の奥で急に嗚咽おえつを堪える声が聞こえた。（何かあつたんだ…。）ハシンドウの脳裏に浮かんだのは、昨日死闘を繰り広げた虚無の姿であつた。その勘がはずれていることを願つハシンドウだった。

「大丈夫ですか？落ち着いて聞かせてください。シンジに何かあつたんですか？」

「…今、総合病院にいるんですが、…シンジが、事故にあつて…。」

シンジの母親の話を整理すると、シンジは一昨日あたりから調子が悪く、精神的にも不安定だつたそうだ。母親がパートに出ている間、昨日の昼過ぎにシンジの乗つていたスクーターがはねられ、意識不明で病院に運ばれた。今朝になつてようやく目を覚ましたシンジは、俺の名前を口にしたそうだ。

「分かりました。一度そちらに伺つてもいいでしょつか。」

「ええ。きっと息子も喜ぶと思うので…。」

ハシンドウは母親に用件を伝え、急いで着替えを済ませ、バスに乗つて総合病院へ向かつた。母親がありあわせのタオルやら果物やらを持たせてくれた。

『ポンポン、どう思う?』

『シンジ君のことポン?...なんとも分からぬポン。もし気になるなら少し様子を見てきてもいいポン。』

『えつ、そんなことできるのか?』

『できるポン。たぶん10分くらいで行つてこれるポン。』

そういうとミコトの守り神であるポンポンはバスの窓を通り抜け総合病院のある方へと向かつていつた。ポンポンとミコトは青色に光る一本の線でつながれていた。

総合病院はミコトの家から30分ほどバスで行つたところだ。バスから神城高校のある丘が左側に見える。その中腹には山神セイラの家があるはずだ。

休日といつても土曜日は普段なら午前中に部活がある。剣道部であつたミコトは、昨日、退部届けを出してきたところだ。寂しい気持ちもしていたが、昨日のようなことが続けば、どちらにしろ部活をしていられない。色々と聞かれるよりも、初めからやめておいた方が賢明だったんだ。ミコトはそう自分に言い聞かせていた。

バスの中でふと頭をよぎることがあった。（もしシンジが虚無羅にとりつかれていたらどうする。）

ミコトはシンジが精神的に参つているという言葉を聞いたときこそ、何か違和感を覚えていた。やはり、考えてみると、虚無羅がシンジにとりついているという可能性は少なくない。

（虚無羅がいた場合を考えておかないと…。まずは、シンジから影を引き離すのが先決だな。この前セイラがやつたように、一人が影をひきつけて、その間に本人に触れて祓いの詞を唱えるのが一番いい。でも、セイラがいない一人のときは…影と戦いながら本人に祓いの詞を唱えるのか…厳しいな。しかも、影を消したらシンジも死んでしまうんだったよな。あとは、シンジの体に虚無羅が乗り移つ

た場合が、シンジを動けなくして祓い詞を唱えればいいのか…。今のシンジは、きっと動けるような状態じゃないから、乗り移られることはないだろ?。)

一人考えをめぐらしていると、ポンポンが帰ってきた。

『やばいポン』

『どうした?』

『強そうな虚無羅^{きよむら}がいたポン。』

『やつぱりか。…ポンポンはどうすればいいこと思つ? 一人で対処する方法が、なかなか思い浮かばないんだ。』

『うーん、セイラに頼んでみるポン』

『そつか。セイラには悪いけど、それが一番だな。一度バスから降りて、電話をかけようか?』

『その必要は無いポン。ポンがリリィ（セイラの守り神）に念をあくるポン。』

『えつ、そんなことができるのか?..』

『フツフツフ。できるポン。』

『ちょっと待ってるポン』

目を閉じたポンポンは何かブツブツと唱えだした。

『かけまくもかしこき いざなぎのおおかみよ わがおもいを そのみこころにより つたへたまふことを かしげみもつゆ^す』
暫く目を開じていたポンポンの目が開き、

『リリィもセイラもその病院にかけつけてくれるポンよ。』

とミコトに向えた。

『そつか。やつたな。サンキュー。』

（これでどうにか虚無羅に対応できそうだ。）

第32話 ヘンジを救へ（後書き）

シンジ」とつっこむる虚無羅との戦いがせまつてきました。//「トの成長振りは見られるのでしょうか？」

筆者コナー

本屋つて楽しいですね。いつまでいてもあせません。
雑誌読んだると時間を忘れてします。
科学雑誌とかも好きです。ニコートンもこー。けど、高こへへ

総合病院に到着したミコトは、セイラの到着を待つために待合室に腰を掛けた。（病院か、あんまり落ち着かないな。きれいにしてあるけど、やはりどこか暗い感じがする。）ミコトは待合室に設置してあるテレビを見ながらじばらく待っていた。

ふと周りを見渡すと、そこには栗色の髪が肩にかかるている涼しげな顔をした少女がこちらを見てくる。

「やあ。」

「こんにちは。」

「昨日はありがとう。」

「ええ。こちらこそ。ミコトには助けられたし。」

「それはお互いだ。…いきなり呼び出してごめんよ。」

「いいわ。逆に虚無羅きよむらが見つかって嬉しいくらい。」

（へえ、自分は虚無羅なんて見つけたくないんだけどな…。）

「うまくできるといいけど。」

「そうね。ここでは、あんまり私の力は使えそうに無いわね。」

「確かに。自分も室内だとやばいかな。相手を屋外に誘わないこと。」

「そうね。」

二人は簡単な作戦を立てた後、シンジが寝ている4階の南病棟へと向かった。

「403と、あそこか。」

403号室まで後数メートルとこりこりんで、ミコトはその体に

感じる気配に足を止めた。

「これは、…やばいね。」

「ええ。私も感じるわ。」

「昨日のトカゲとは格が違うな。できるか？」

「ええ。大丈夫よ。」

ミコトは心を落ち着かせて田の色を黒くした。自分の体から出る光のオーラの量を抑えることで虚無羅に気付かないようにしたのだ。マナの力に覺醒したミコトやセイラは虚無羅に見つかると襲われる可能性があるからだ。

そして、2本の太い角を持つ虚無羅を強制的に威嚇し、自分へとひきつける役割を、セイラは担っていた。闘牛士の持つ赤いマントの役割に似ている。

セイラは403号室の入り口に立ち、静かに口を動かした。

「オン ロロロロ マカリシエイ ソワカ オン ロロロロ マカラシエイ ソワカ · · ·」

セイラの口からその言葉が繰り返されるたびに2本の角を持つ牛のよつな虚無羅から発せられる黒い気が強まっていくを感じた。

「うるさいやつだ」

その低くしわがれた体の奥に重く圧し掛かるような声を聞いたのは、セイラだけではない。

「虚無羅が喋った？」

その恐ろしさを肌で感じるミコト。（セイラがやばい。）

「ぐをうわああ

恐ろしき声を上げて、牛のよつな虚無羅はその背中から生えていた両翼をぱたつかせ、勢いよくセイラに向かつて襲い掛かった。その声はまるで近くでジェット機の音を聞くかのようにびりびりと体に堪えた。虚無羅の両翼は病室の入り口の幅を悠に超えている。その体はまるで牛くらいあり、黒茶の毛で覆われ、足はミコトの体ほどある馬のよつな足であった。（でかい！）トカゲのときと同じよう虚無羅とシンジは黒い縄のよつなものでつながっていた。

いよいよシンジに取り付いていた虚無羅との戦いが始まります。牛のような虚無羅という表現しかないのですが、今後は敵さんにも名前をつけようかなと思います。できるだけ名前をつけるのは少なくしたいと考える筆者あります^ ^；

筆者コナー

魔法使いつていいですね。でも、魔法と靈、どちらを信じるかといえば、靈ですね。魔法はかなり胡散臭いです。ハリー・ポッターは嫌いじゃないです。でも、突っ込みどころ満載ですよね。どうしてここでの魔法を使わないの？とか。まあ、そんなことを言つたら、たいていのものは落ち着いてみていられませんが^ ^；

第34話 ～牛虚無羅との対決～

咄嗟じっさミコトは病室に飛び込み、シンジの体に触れた。可能な限り早く祓はらいいの詞を唱えようとした。

「こしゃくなー。」

セイラを追つていた虚無羅は狙ねいを変えてミコトへと向かつてく
る。

ミコトもすばやく祓い詞を唱えた。同時にミコトの体にはポンポン
が入り同化の準備は整つていた。

「もうもうのまがご」と つみ けがれあらばはらえたまい きよめ
たまへともうすことを きこしめせとかしこみかしこみもつす、「
唱え終わるのが一瞬早かつたが、その刹那、牛が突進するように
虚無羅こがは尖つている角をミコトの腹めがけて突進してきた。ミコト
は咄嗟に虚無羅の額に右足を乗せたが、その勢いのまま、4階の窓
ガラスを突き破つて虚無羅もるとも病院の外に飛び出された。後ろ
が壁だつたらそのままミコトは押しつぶされていたかもしれない。
虚無羅の体は無機質なその壁をすり抜けていた。

「ミコトー。」

叫ぶセイラ。あつけにとられている403号室の人々。シンジも
田を覚まし、その瞳はあまりにも不思議な光景に暫く開いたままで
あつた。隣に座つていたシンジの母親は、

「今、ミコト君よねえ・・・。」

と言い、看病の疲れや気苦労がたまつていたためか、その場で氣を
失つてしまつた。

虚無羅の角はクロスさせたミコトの左腕に刺さつていたが、自ら
後ろへ跳んだ反動で勢いが弱まり、貫いてはいない。（痛え！）叫
びそうになつたその言葉を押さえ、第一優先事項であるポンポンと
の同化を叶える詞を真に口にした。

「オン ハロハロ ブラフマー ソワカ」

輝く青色の光がミコトの体を覆い、ポンポンとの同化が完了した。右足に入れ虚無羅の額を蹴り上げるミコト。（痛えんだよ！）刺さっていた角を抜き去り、空気の壁を蹴つて虚無羅よりも前方に進むミコト。いつものような羽をばたつかせてミコトへと襲い掛かる虚無羅。

窓枠から身を乗り出していた緑色の田の少女は、その一瞬の光景を眼にし、また自分も4階の窓から勢いよく飛び降りた。セイラの体にリリイが入り込み、全体が一瞬緑色の光に包まれた。

「オン コロコロ マカリシェイ ソワカ 森よその恵みの神々よわれに力を与え給え。」

南病棟から飛び降りた先には芝生とその周りに植えられたポプラの木が等間隔ごとに立っていた。一本のポプラの木がセイラのところまでつるをのばすと、セイラも紳士に手を差し伸べられたかのようにそのままふっと持ち上げられる勢いでポプラのつるに腰を掛け、つるは幹の方へと移動した。セイラはおよそ100メートルほど北側の上空に見えるミコトと虚無羅へ田をやつた。

ミコトは風の使い方が昨日よりも数段うまくなっていた。足に風をまとい、蹴り上げる風圧を利用して一気に向きを変えたり、流れる風を集めて虚無羅に投げつけたりしている。昨日のように一気にマナの力を使う方法は、その後気を失つてしまつた経験から危険だと感じていたのだ。

しかし、この虚無羅はやはり昨日までの虚無羅とは格が違つていた。虚無羅はミコトの作り上げた風の塊を太い腕ではじいた。その風は病院の壁へとぶつかり、壁は白い煙を上げながら、がりがりという音と共に削られるのであった。

第34話 ～牛虚無羅との対決～（後書き）

もつねよつといいタイトルがあるだろと突っ込みたいのですが、これ以上いいタイトルを考え付かない情けない作者です。牛虚無羅との戦いが始まりました。前回のトカゲ虚無羅より少しでもよい描写ができるべきだと思います。

筆者コナー

エヴァンゲリオンのシンジ育成計画という別冊を読みました。（別冊なのか・・・？）なんか雰囲気がラブコメ的でしたけど、個人的には嫌いじゃありません。

第35話 ～虚無羅対マコト～

鳥のように軽いマコトの体は上昇していた風に乗り、牛の虚無羅さむらの10m程上に陣取つた。

『きっと、あいつは、クイーンクラスの虚無羅だポン。』

両手に風の塊を作り虚無羅に向かつて投げつけながら意識の中でポンポンに答えた。

『クイーンクラス？ 強いってことは分かるけど。』

『虚無羅を他にも作り出せるってことポン。こんな危険な奴がシンジ君に憑いてたポンか？ シンジ君もよくがんばったポン。』

『みたいだな。それはそつと、どうしたら勝てると思ひへ。』

『…がんばるポン！ ポンはマコトと一心同体だポン。』

『…そうか、ナイスアドバイスだ。』

両手を上に掲げ手のひらを大きく開きマコトは先ほどよりも大きな風の塊を作り出した。しかし虚無羅も待つてはくれない。それを見止めるとすぐさま羽をばたつかせてマコトへと向きを変えて向つてきた。

くぐをおおおおお。こざかしいやつめ♪

邪悪としか感じられない恐ろしい気迫と声に一瞬体が硬直するマコト。

「なんだってんだよ。」

気を取り直したマコトは、上がつてくる虚無羅に正面から向かつていた。

く人間風情が！ 引き受けさせてくれぬ…♪

「これでもくらえッ！」

両手を振り下ろし、集めた風の塊を虚無羅に向かつてぶつけるマコト。しかしその風の塊は虚無羅の雄叫おたけびと共に一つの角で振り払われた。振り払われた風の塊は、今度は駐車場にとめられていた車を直撃し、窓ガラスが飛び散りタイヤはパンクし、車体は傷だらけ

になっていた。虚無羅の角の根元からも濁つた青色の液体が滲んでいた。

そのまま下にもぐりこんだ虚無羅は硬く握り締めた拳を「！」の腹に向け思ひきり振り上げた。

瞬時に両腕をクロスさせたミコト。そのガードの上から虚無羅の拳がミコトを襲づ。シミシミといつ骨のきしむ音と共に、ミコトははるか上空まで飛ばされた。角によつて付けられた左腕の傷から鮮血が飛び散り虚無羅の顔にかかる。虚無羅は額についた血を長い舌でなめるとまた勢いよく羽をはためかせ、ミコトが飛ばされた方へと飛んでいった。

（やばい、腕が動かせない。痛え。）あつという間に病院がマッチ箱のように小さくなつた。（かなり飛ばされたな。肺はやられてないか。）からうじて右腕に感覚が戻ってきた。（きっと奴は追つてくる。こつちがくたばるまであいつらは死の宣告を免れないんだから。・・・懸かるしかない。）

虚無羅が追いつくまでの残り数秒、ミコトはその右手を開き、集められるだけの風を集めた。（ここで気を失つたら、死ぬな…。）ミコトは風の龍を呼び出したとき、一度目は動けなくなり、二度目は氣を失つた。果たしてこれだけの風の力をぶつけたとき、命があるかさえミコトには確信できなかつた。

（さすが高い所だけあって、いい風が吹いてくれるよ。）

ふと眼下に入つてきたのが、一直線にこちらに向かつてくる黒い物体だ。それが虚無羅と認識するまで僅かの時間もからなかつた。

（来るつー）

第35話 ～虚無羅対マニア～（後書き）

いつも＾＾筆者です。『新世界』も、あと僅かです。

個人的には自分の世界観が出来て楽しかったのですが、なかなか読み手を引き込む小説になつていたかどうかと思うと疑問視されます。ですので、この戦いでけじめをつけて、終幕にしようと考えています。

それでは、あと僅かですが、最後までお付き合いしていただけたらと思います＾＾

筆者「一ナ

お勧めコーナーが苦しくなつてきたので、話に関係のない雑話を書いていこうと思います。

好きな人は、イチロー選手です。毎日カレー食べようかなと、真剣に思いました。（そこをまねてどうする＾＾・）

第三六話 ～虚無羅対ミコト～

右手に力を込めるミコト。数秒後にはミコトの体と接触するだろう。よほどあの角がお気に入りなのか、ミコトの体を貫いてやううとする虚無羅の気迫が伝わってくる。（やうは問屋が卸すかつてんだよつ）声にならない声でミコトがつぶやく。できるだけ近くから…。避けられでは絶対にだめだとう思春がミコトの頭に働いていた。

ぐぐをおおおおお クタバレー

頭から突進してくる虚無羅

（くたばるのはお前の方だ！）

「オン ロロロロ ブラフマー ソワカー！…！」

叫びともにぶつかり合つ一人。およそ真下に向けられたミコトの拳からは虚無羅の顔ほどある風の龍が放たれた。その龍は丁度虚無羅の2本の角の間を通り、その額に噛み付き、暫くの間龍と虚無羅は力と力のぶつぶつかり合いをするかのように硬直状態が続いた。

「うわあああああ…」

なんとか意識を保つてゐるが、激痛が全身を駆け巡り、体の一部たりとも動かすことはできなかつた。重力に引っ張られ、あれほど軽かつた体がまるで鉄の^{おもい}錘になつたかのように感じ、真つ逆さまに地上へと落ちていく。

思うことはたくさんありすぎた。（…頼む、勝つてくれ。…勝つたとしても、…俺は…このままじゃ、やっぱいつ！…）

「セイラー！」

声にならない声で不意に叫んだ言葉は、昨日出合つたばかりのセイラの名であった。もしも今助けてくれるとしたらセイラしかいない。ミコトは心の中にあるその気持ちに気付いたのか気付かないのが、思い切りその名を叫んだ。

落下を続けるミコト。ミコトの頭に今までの人生が思い出された。

走馬灯が駆け巡っている。

思い浮かぶその過去の記憶から目覚めたとき、ミコトの体は何かに受け止められるようにして落下の勢いがとまった。

「わたし、また何もしてあげてないわね。」

「いいや、命の、恩人、だよ。」

涙腺を破つて出てきそうになる涙を必死にこらえようとミコトは重い口を開きながら、できるだけ明るくさわやかに呟いた。

第三回 話～虚無羅対マニア～（後書き）

筆者コーナー

うただひかるのBEAUTIFUL WORLDも好きです。エヴァの劇場版の主題歌ですね。見てはいませんが、雰囲気があってそうです。（昔の話題ですみません。）FREE DOMの前5話みのがしゃいました。＾＾6話こそ見るぞ！！

第37話 ～虚無羅対セイラ～

セイラに助けられたところ、安堵感が、ミコトが必死に隠していた痛みと緊張を呼び覚まし、ミコトはまたも氣を失ってしまった。

「うふつ。しようがない人ね。」

何が可笑しいかわからないが、セイラは穏やかな笑みを見せると、やさしく地面の上にミコトをおいた。

病院の隣にある公園の中でも、比較的木が多い茂っているひつそりとした場所にミコトは落ちてきたのだ。木を操り無事に寝かすことができたセイラであつたが、次の瞬間、まがまがしい気配が上から迫つていることにセイラは気がついた。

くうをおおおお

雄叫びおたけをあげた牛の形をしたミコトの倍はあるうかと思つほどビの巨体は、龍の形をした何かに押され、セイラとミコトから僅か10㍍ほどしか離れていない林の中に突っ込んだ。

虚無羅も無機質なものは通り抜けることができるが、土や木などはその質量を感じる。砂煙とともに半径3㍍程の半球状の穴ができ、その中心には虚無羅が埋まっていた。龍の姿は消え、あたりに放射状に勢いのよい風が吹き、セイラの髪を搔き揚げた。

(まだ、虚無羅の核が残ってるわ…。)

セイラは木に手を掛け、すぐにつるを虚無羅へと伸ばした。

穴の中心から砂煙が立ち、太い右手が地面をつかんだ。その右手に力が込められ、起き上がつてくる巨体を支えていることが分かった。その右腕を木のつるがつかみ、つるによつて引き上げられた巨体に、瞬時にその左手と両足につるが巻きついた。

くぐをおおお

「オノロコロマカリシヒイソワカ」

力を込める巨体にセイラもマナの力を強めて対抗する。

「瀕死なのに、すごい力ね。でも、無駄よ。」

巨体の首にはまた新たな木のつるが巻きつき、その首を締めつけ
る。

「ぐわあああああ」

痛みにも似たその雄叫びとともに、巨体はさらに力を込める。

「くつ、なんて力なの…。もう、限界ね。」

額に汗の滲むセイラが手をかざし、その手を自分のほうへと勢いよく引き戻すしぐさをすると同時に、新たな5つの太いつるが今度は先端を尖らせ、巨体へと向かっていった。次の瞬間、

「がぐわあああああ」

とこう悲痛な叫びとともに、巨体は5つのつるに貫かれ、獣のそれと同じようなしぐさでどす黒い青色の液体が飛び散った。

「お前たちが憎い…殺す…殺してやる…」

心の底まで響くような低い虚無羅とは対照的なもの静かな声で、セイラは次の言葉を口にした。

「そうね。私もあなたたちが憎いわ…。」

巨体はつるに貫かれたまま動かなくなり、体は次第にその色を薄くし、セイラの巨体にもその姿を認めることができなくなつた。

「浄化、完了。」

緑色に輝く瞳には、悲しみや憎しみの感情が垣間見られた。
かいま

第37話 ～虚無羅対セイラ～（後書き）

長く長いお休みしてすみません。

パソコンが壊れました。

心よりお詫び申し上げます。

もうすぐ最後になりますので、お付き合いでお願いします。

読んでくださいありがとうございます^ ^

最終回（締書也）

これで最終回となつます。
おちまへじだわつ、本当にあつがといへりぞれこまつた。

割れた窓ガラスの先を見つめるシンジ。

「何があつたんだ？」

わけもわからず首をかしげるシンジ。

「あいたたた…。そつか、俺、事故にあつたんだ。」

不思議と昨日まで感じていた心の中のもやは晴れ、体が軽く感じていた。すぐに看護婦が駆けつけ、病院の窓ガラスを交換し、あたりを掃除している。患者にけが人がいない事を確認すると、ほつとしたようによつて受付へ戻る。

（あ、あの女子、たしか窓から飛び降りたよな？夢か？）
頭の中が混乱していた。

（でも、なんだか今までの胸を締め付けるような苦しさがない。）
なにが起こったのかは整理できないシンジであつたが、胸の苦しみが取れたこと、不思議と生きる意欲がわいてくる心の変化を感じ、その目にはとめどなく涙があふれていた。

（…不思議だ、寝ているときにコトが見舞いに来てくれた夢を見た。）

あたりが騒がしくなつてくるのを察し、セイラはコトと共に木のつむに支えられ、できるだけ人目に付きにくい林の奥へと移動した。

「また、眠っているわね。」

穏やかな笑みを見せると、コトの左腕の傷跡に手をかざし、優しい声で何かをささやいた。

「オン ロロロロ マカリシエイ ソワカ。恵みの神よその慈悲をもつて癒しの力を我に与え給え」

セイラの手から強い緑色の光が発せられ、出血が止まつていなかつたその左腕の傷は、ゆっくりではあるが、しだいにその傷をふさい

でいった。

「さすがに、疲れるわね…でも、あともう少し。」

先ほどの戦いでマナの力を使い過ぎていたセイラには、//コトを癒すことやれ、汗が滴り落ちるほど過酷さがあった。

ふと起き上がると、そこは林の中、隣にはセイラが眠っている。栗色の髪の毛と雪のような白い肌には土がつき、何か大変な作業をしていたという様子を思させた。

(「セイラ。」)と、声を掛けようとした//コトは今の状態をそう難しくなく把握できた。(左腕の傷を治してくれたんだよな。ありがとう。)

//コトはゆっくりと起き上がり、セイラを背負う。よほど疲れていたのだろうか、セイラはその動作にも田を見ますことはなく、揺られるがままに//コトに背負われ、共に帰路についた。

「シンジの見舞いは明日だな。ごめんな、シンジ。」

病院を振り返る//コト。壁にまみ//コトがつけた傷がいくつか残っている。なにやら病院の周りがいつもよりあわただしいという雰囲気を感じたが、もうピークは過ぎたというように、人々は病院から散り散りに去っていく様子だ。

ゆられる体がセイラの意識の回復を早めた。(あ、そうか、私が//コトの傷を癒そうとして、そのまま寝つてしまつたようね。)うつすらと田を開けるセイラ。//コトが一生懸命にバス停へと向かっている。その横顔には夕日が差し込み、うつすらと額に滲む汗は、//コトを少年から男へと変化させていくようだった。

少年と少女の旅は、ここから新たに始まりはじめる。

しかしそれは、少年と少女だけではない。

この世に生きる人が、全ての人があ

生まれた意味を、幸福を求めて

旅をしているのだ。

セイラは言つ。

「わたしたちは、きっと特別なんかじゃないわ。

今に生きる全ての人が悩み、孤独になり、それでもがんばっていき
ているのね。」

「ああ。でも、だからこそ、きっと人は、よくなるべく一緒に生
きようと

進化していくんだ」

「そうね。わたしも、・・・あなたと会えて、よかったです。ミコト。」

「

= END =

最終回（後書き）

いかがだったでしょうか？

話の続きを考えていなかつたわけではないのですが、なかなか忙しくなってしまったので、このあたりで失礼します。

何か感想をいただけたら嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1528d/>

新世界

2010年10月8日15時51分発行